

注口土器の研究

—主として東北地方の注口土器集成—

鈴木克彦

1はじめに

縄文土器の形態（器形）は、鉢形と壺形を基本にしてこの二つの器形のバリエーションとして細部にわたる形状変化を付加させながら発達してきた。あたかも独立した器形のように見える注口土器もその一つで、それはまた世界に類を見ない多様な器形を生み出して発達した日本の縄文土器の代表的かつ個性的な器形の一つでもある。

注口土器についての研究において、大正年間の中谷治宇二郎（1927）による体系的な研究の果たした役割が極めて大きい。これによって日本の注口土器の全容と類型化された分類から概ねの編年的序列と地域的分布領域を理解することができた。以来今日まで、特定の時期の注口土器を考察したものがあっても注口土器の全容を体系的に論じたものはなかった。中谷治宇二郎は、それまでの考古学の方法論を批判的に捉らえてグローセの理論を引いて工芸的に分類しようとした。だから、用途機能の問題を意識的に避けた。勿論、中谷治宇二郎にも編年観という弱点があったし、それを突いた山内清男の指摘がある。この編年の問題と中谷の文化的類型を捉らえる方法を優劣択一するのではなく、整合性を持たせて論じることが課題となろう。

注口土器は、東北地方によく盛行し発達した器形である。勿論、その分布範囲は全国にわたる。比較的多い関東地方には後期前葉の堀之内式と加曾利B式に発達したことが知られている。しかし、大局的に見れば盛衰多寡の幅が大きい。これに対して東北地方の場合は中期から晩期まで多少の地域差があるが、一貫して継続盛行し、最後には究極の注口形とさえ言える亀ヶ岡式の注口土器に昇華した。これだけをとって見ても注口土器は東北地方においてこそ研究されるべきテーマだと言って過言でないが、関東地方の注口土器もまた東北地方と深く関係するばかりか、元はその影響下に発達した器形だとさえ言ってよい。注口土器（の器形発達の系譜）は、決して一系統のものではなく、鉢形、壺形の二系統からなる。そこには時期と地域を違えた出自、発達の軌跡があり、例えば一見して壺形系統のように見える関東地方の堀之内式の土瓶形注口土器が元来は鉢形（浅鉢形）をベースに持ち広口壺形ないし甕形の形態的要素を取り入れて形成されたものである。一方、東北地方では十腰内1式の段階で中期と後期を境にそれまでの鉢形系統から壺形系統の注口土器に転換する。例外的に岩手、青森県に鉢形注口土器が出現しても、それ以後再び鉢形系統に帰することはなかった（注1）。これにも関東地方と東北地方の注口土器の大きな違いがあるし、東北地方においても北部と南部では後期の或る一時期に汎東北地方を席巻する注口土器（宝ヶ峯型）を見るが、大方は北部に優位性を保ちながら錯綜して発達する。また、晩期の注口土器が前半期においてこそ北部に多いことに対して、後半期のそれは南部に生きながらえる。こういう消長推移の変遷過程は、中谷治宇二郎の深層に意図した文化の類型の問題と係わる。注口土器の当座の研究は直ちに結論が出そうにない用途機能論が主眼ではなく注口土器を製作使用する主体者の文化や社会の在り方を注口土器を通して考察することにある。そういう意味で、編年という縦軸と類型化による分布や文化の類型を捉らえる横軸を整合確立しながら論じることが大きな課題であると考える。そのため、本論ではできるだけ対象を広げて日本の注口土器の全容を理解しようと考えたが、紙面の都合により東北地方の資料を中心にして集成考察し、関東地方の場合は最小限に一部を掲載したために摘まみ見る程度になった（注2）。北海道の場合は改め

て別稿に委ねることにした。

2 注口土器の名称について

注口土器については、注口形、注口付土器の名称がある。それまでの土壙や急須に似た形という意味で土壙（土瓶）、急須形土器と呼び習わされている慣習的名称に対して、中谷治宇二郎が工芸的な形式分類の概念を与える意味で注口土器と呼んで以来、この名称が広く採用されるに至ったものである。

土器の名称については、日本のみならず各国でもその国の日常用具に準えて呼び習わすことが多く（山内清男1964）、中谷治宇二郎の当該研究を見るまでは日本でもその初期の考古学分類では「日用品」として項目立てられ、その中の器形、器種の一つに土壙、急須形が分類されてきた経緯がある（八木樊三郎1902）。土壙、急須は、江戸時代から現代まで使われている生活用具の名前だが、これだと考古学的には最初に機能のイメージを与える結果になってしまうことを憂慮したものである。土壙とは通常壺形の体部に注口を付したもの（山内清男1930、中谷治宇二郎1943）、急須形（型）の場合は注口形特有の形を有しダイヤモンド形の主体部に注口を付したものである（中谷1943）。つまり、注口土器の名称は当時の一般的な遺物に対する古典的な命名の仕方であった予め用途を連想するような名称から脱却した遺物の持つ形式の客観的観察を通してその形式分類を行った結果として提唱されたものであった（中谷治宇二郎1929）。

山内清男（1967）は一貫して注口付土器と呼んだ。既製の器形に注口部を付した土器という意味である。この方がより機械的な名称で、大半の形態は通常の土器に注口部を付けたものが多いので頷ける。当初から注口土器の独自な器形というものは存在しないし、堀之内式、加曾利B式や亀ヶ岡式の独自と言われる完成された独特な器形さえ元は鉢形、壺形のいずれかに由来する。それらの独自な器形というものの成長の軌跡を知ることは必要だし、反面或る一時期に注口土器の器形が他の土器の器形に類を見ない完成された器形を呈することも事実だが、しかし、敢えてそれぞれを分別して呼び分ける必要性がない（注3）。

3 注口土器に関する研究史

（1）中谷治宇二郎の研究以前

注口土器が学史上に初めて登場するのは、江戸時代の『耽奇漫録』（文政7年）に掲載された亀ヶ岡遺跡出土例のスケッチ画である。

注口土器の研究は、近代日本考古学の祖と称えられるモースの段階に逆上る。大森貝塚で日本最初の考古学的発掘を行ったモース（1879）は、その報告書の中で土器を「煮炊き土器」、「手にもつ土器」、「水入れにもちいた類のすぼまった土器」というように土器の用途を念頭において分類し、その図版10の解説文で注口土器の注口部について、水入れに用いた土器の注ぎ口の部分だと生物学者らしく簡明に表記したのである。

その後、青森県亀ヶ岡遺跡を始めとする東北地方などの各地で当該類例の幾つかが相次いで紹介された。それらを見ると、「把手なき急須の如し」（佐藤重紀1889）とか、「急須形の貝塚土器」（若林勝邦1890）と記されている。また、大野延太郎（1899）が石器時代の土瓶と呼び、図示された2個の類例は急須形式の土瓶というように記述している。同じ類例を中沢澄男（1898）は急須形と呼んでいるので、土瓶という名称よりは急須形の名称が古いことが分かる。というよりも急須形の類例の方がより早くから知られていた訳である。急須形の場合は現在の晩期の注口土器、土瓶形の場合は後期の注口土器のことである。

(2) 中谷治宇二郎の研究以後

中谷治宇二郎が大正14年末に口頭発表した「注口土器の分布に就て」は、『人類学雑誌41-5』に掲載された（中谷1926）。その中で、中谷の調査した類例は317点、しかも欠損品を除いているのでその数は五百に近いものと推察される。その分布は全国にわたる。広い分布範囲を持ちながらも類例が関東地方と東北地方に多いことを取り上げて、日本地図に注口土器の出土遺跡の分布図を図示し、先史地理学的手法をいち早く取り入れた功績も高く評価されている（江坂輝弥1972）。また、1遺跡における割合（比率）を概ね零点以下とし、土偶などの比率に類するとした。口頭発表の背景には後年の大著があり、この論考ができていた時には既にその稿を成していたらしいことは、A～D型の注口土器の分類にも表れているが、分類上のポイントは側面の曲線（断面形）にあることを記している。また、A型が関東地方の東京湾地帯、B型が関東地方、C型、D型が東北地方に多い、ことを明らかにした上で、分布状況から見て東北日本の沿岸地帯にこの文化の特質があつてより新しい器形が東北地方に多いことから日本の石器文化は西南（関東地方東京湾地帯）から東北（地方）に移行したものであろう（北漸論）、と結論づけたのである。すなわち、1927年の『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』では資料数も前著に比して455点を扱い、地名表、出典、分布図、実測図などが集大成されている。海外での同類資料との比較も行い、グローセの影響を受けて土器に施文される文様というものは工芸的なもので海外の類品とは直接的な関係はなく、日本の注口土器は独自に発生したものと冷静に観察している。分布状況特に東日本のうち海岸線を有する関東地方（茨城県）、東北地方（宮城、岩手、秋田、青森県）に偏っていることを強調し地方的差異を観察し、三つの地方圏、八つの地方区を設定したが、実際の記述には河川流域に沿った分布が見られ注口土器と海岸線との直接的関係を述べている訳ではない。全数量のうち、大半が薄手式（後期）、陸奥式（晩期）のものだが、厚手式（中期）の類例が2点あると記している。最大の功績は注口土器を形態の上から、A～D型に4分類したことである。つまり、A型は環状の把手を持つもの（把手付き型）、B型は土瓶形、C型は急須形、D型は粗型でC型の退化型、他に片口形、環状型などがあるという訳である。A型は東京都、埼玉県、B型は茨城県、C型、D型は青森県に数量のうえで最も多く分布が集中し、これらのことからA型は東京湾沿岸を中心とした関東地方、B型は霞ヶ浦沿岸を中心に青森県に及び、C型は青森県などの東北地方に限られ、D型はC型に付随する、ことを明らかにした。また、例えばC型の晩期注口土器の部位名称（名所）について従来の日常用具に準（なぞら）えた当時の一般的な名称の呼び方を批判的に考えその各部位を機械的に分類した点、注口土器に対して正面があるとする（正面性を求めた）点、晩期注口土器の形態が注口部を下方に移行し実用的意義から遠ざかり液体を容れるためには実に不利な器形で注口土器としての究極に発達した器形進化の形式と見なした点、などを評価することができる。ただ、中谷治宇二郎の様式或いは形式というものが編年学派の八幡一郎や山内清男に代表される型式論とは多少違った文化概念を持つものであったがため、今日の型式論からすれば批判的に見られるのがこの辺の事情を物語るのである。

また、編年的序列よりも形態的分類による文様の様式の発展の新旧を論じその文化的中心を推し量ることはできかねる。しかもそれがあたかも、石器時代の文化的中心を示すとさえ結論付けてその特異型を高度な文化階梯に進んだ特別な文化環境の下に生まれたものと過大評価した。

次いで中谷治宇二郎（1936）は少し間を置いて、『日本新石器文化の一考究』を著した。副題に分布圏と文化圏とあるように、注口土器と土偶の複数の遺物による複合した分布関係を文化圏と呼びその意図するところは当時としては斬新的なものであった。しかし、注口土器の形態、文様の分類に編年的な視点を欠くために今日の所謂型式観と違っていて分かりにくいものとなっている。

さて、その後杉山寿栄男（1928b）が著した『日本原始工芸概説』は、実質的には甲野勇、中谷治

宇二郎の筆になるものらしく（江坂輝弥1972）、注口土器についてはその主体部は甕形、鉢形、壺形に注口を付し、後に注口土器としての一定の型を持つに至ったと述べ、大形から小形、高いものから低いものへ、注口部も長いものから短小にという変化が見られるとした。特に、晩期の注口土器が土質精選焼成発達の優秀な製作技術を認めた点の他に、青森県是川中居遺跡を例に土器組成比率を求めたり（注口土器の占める割合は約18%）、土器の高さと幅が同一寸法とか器高が径の3倍以内になるといった長谷部言人の九等分分類法に通じるものがある3等分正方形の比例値を考案し、土器の形態（器形）研究をより一步進めた。掲載された文様図版解説は、次の杉山寿栄男（1928a）の『日本原始工芸』に通じる。

当時の注口土器に関する研究は殆どこの両者によって行われている印象を受けるのは、これら以外に表立った研究が見られないせいもあるが、山内清男（1932）は亀ヶ岡式土器の研究として編年的研究に主力を注いだその中に、器形組成の一つに注口土器を取り上げて亀ヶ岡式では注口付、香炉形は最後まで続かない、とその時間的視野の一端を述べた。それ以上に、この中谷治宇二郎の研究については上述したように批判的に見ていた。それは、中谷治宇二郎の注口土器A型、B型が自ら設定した堀之内式、加曾利B式、安行式に伴うことが既に知られていたにも係わらず恰も今後の層位的発掘に編年序列を待たなければならないかのような記述に不満を表明し、D型はC型に先行するものでA型、B型、D型、C型の順序を指摘すると共に、文様観察に基づく型式の年代的序列を考慮しない方法論（様式論）の矛盾を指摘した（山内清男1929）。そして、八幡一郎（1928）もまた暗に方法論の違いを表明し、「編年」という中谷治宇二郎の弱点を指摘している。この点は中谷治宇二郎と山内清男、八幡一郎の意図する考古学的方法論や歴史観の違いにもよるであろうが、中谷の研究の有為性を否定するものではないとしても今日の考古学型式論（編年論）からすれば山内らの指摘は正しい。

また、山内清男（1967、初出は1939～41）の『日本先史土器図譜』には前期関山式や後期堀之内式、加曾利B式の片口形、中口土器の類例が幾つか紹介された。

注口土器の出自に関して藤森栄一ら（1963）は、中部地方に発達した種子壺、酒壺の貯蔵形態（具）である鍔付有孔土器が両耳壺に移行し、一部が注口土器に変化したと考えた。中期の勝坂期に現れて発達した鍔付有孔土器が加曾利E式の終末期に両耳壺と注口土器の形態に変化してその機能が吸収されたというものが、その間の経緯を実証的に示したものではなく、鍔付有孔土器に付いた尖端の窪んだ把手状の突起の様子が注口土器に似ているというだけでは異論が生じた場合に反論の余地がない。また、渡辺誠（1965）は鍔付有孔土器を醸酵器とする前提の下に勝坂式と亀ヶ岡式の注口土器が結び付くとし、土瓶形注口土器は形態に見られる耳状の突起が蓋を堅縛する機能を持ち、それに注ぎ口を附加した特徴だと推敲した。両耳状の突起が機能を体現した造作物であることを直ちに否定するものではない。しかし、鍔付有孔土器→両耳壺→土瓶形注口土器→急須形注口土器・細口壺の変遷と鍔付有孔土器の波及が遅れた関東地方に壺形が発達せず波及の早かった東北地方の後期に細口壺、小型注口土器が発生したのは勝坂式の受容の在り方が関東地方と東北地方では違ったからだと述べ、鍔付有孔土器の機能による器形分化が細口壺と急須形注口土器を生み出したと説明した問題は、時空領域を逸脱し山内清男が中谷治宇二郎の研究に警鐘を促した編年論の主意を考慮していない。

八卷一夫（1963）は、東北地方南部の中後期に多く出土する注口土器の初現を大木8b式に求め、大木9式に他の土器とセットを構成するようになると。その時期の類例に小型で朱塗りの例があったりその出土状態や複式炉跡を持つ住居跡に多いことなどに注意し、また関東地方の加曾利E式に少ないことから、東北地方南部の中後期には注口土器が一般化した形態で従前の形態とは異なって煮沸、貯蔵の機能とは違った用途に変化したことを想定した。中期末葉の注口土器は小型鉢形、鉢形、深鉢形から分化して注口土器としての器形が定着したものと考え、上述の藤森栄一や渡辺誠の所論に

疑問を投じた。

その後、概説書には度々注口土器に関する記述が見られたが、表立った研究は見られなかった。そういう中で晩期の注口土器について論じた藤村東男（1972）の所論は、上記の藤森、渡辺の意見を過大に評価した嫌いがあるが、編年を基軸に据えて後期の注口土器は壺形の器形と同じである反面晩期ではそれとは違って独自な形態をとり、関東地方と東北地方では独自性があることなど、晩期注口土器の研究の緒を開き大洞諸式毎の注口土器の概略の様相を明らかにした。その後の藤村東男（1988）の研究は、九年橋遺跡の資料を通して前著で晩期第5類とした壺形に注口部の付いた器形を急須形から壺形への変化として再考し併せて注口土器の変遷を考察したものである（図24）。具体的には大洞C2式からA式にそれが行われ、当該期の精製土器全般に行われている形態変化と同じものだという訳である。注口土器の機能が壺形に統合された結果、注口土器が減少消滅するという問題も興味深い。その動機に祭事の変化を想定しているが抽象的である。このような一連の藤村東男の研究は、晩期亀ヶ岡式土器の注口土器に口縁部が内湾するA型、膨らみをもって外反するB型、壺形に近いC型とその形態上の特徴を機械的に類型区分したり、岩手県九年橋遺跡から多量に出土した資料によって大洞諸式土器と対比させた注口土器の編年を基軸に据えて器形と文様の関係を捉え、それらの各要素の変化を型式間で特に大洞C2式からA式に見られる複雑な動態を見極めようとする点で効果を上げた。このような考え方を受けて、安孫子昭二（1982）は晩期注口土器の変遷表を作成した。今後はそれらを補足修正しながらより体系的なものに止揚することが課題である。

同じような注口土器の編年は、丹野雅人（1985）や池谷信之（1990）、鈴木徳雄（1992）も中期末から後期前葉を対象に行っている。後期前葉は全国的に注口土器が急激に増加する時期で、特に関東地方の注口土器の形成に東北地方の影響が深く係わりあいを持っていることを明らかにすることが大きな課題だと思うので、池谷の所論は一定の評価を与えることができる。その一方で、同氏の言う綱取・堀之内型注口土器の注口部に付く橋状或いはリング状の吊り手（把手）の出自や堀之内2式、加曾利B式の体部が球形を呈する地域性の強い関東地方独特な形式の出自に対する十分な説明をすることであったと思うが、いずれも一系統の単線的な説明に終始している。そこにはもっと複雑な錯綜した相互の係わりあいが認められることは当該期の土器に見られることだが、丹野と共に少し有孔鍔付土器にこだわったきらいがある。また、注口土器が瓢形、鉢形、壺形から分化したものとする鈴木の論考は一定の評価を与えることができ、その指摘する注口部の付く位置と文様の関係など詳細な観察を要する問題は少なくない。後期前半期の注口土器を集成しその変遷を既製型式の枠内で捉えた西田泰民（1992）の論考は、元来池谷のそれと論議を深めるものでなければならなかったが、その集成の労を多としても東北地方との関係で言えば不満が残る。この他に、神奈川県の類例を紹介したもの（鈴木一男1989）などや東北地方北部の後期十腰内2式前後の変遷に試みたもの（鈴木克彦1996）などがある。層位的な観察（図3）を行った宮城県大梁川遺跡（宮城県教育委員会1988）の発掘成果は特筆されてよい。注口土器などの土器の編年は、その型式学的考察に優先して問題意識のある層位的な発掘によって自ずから結論づけられることを暗示している。

このように注口土器に係わる研究史から学ぶべき問題が多いが、縄文時代全般にわたるその研究は70年前の中谷治宇二郎をおいて他にないことが分かる。しかし、それは些か古いものとなっていることや、反面中谷治宇二郎が開陳した文化の系統性の問題など、十分に再構築されてきたとは言いがたい側面があることを否定できない。

（3）用途に関する研究史

注口土器の研究の興味深い課題の一つに用途機能の問題がある。しかし、その表立った研究は少な

い。1960年代の概説書には特殊な用途、祭事に係わる用途が謳われるようになったが、明確な根拠がある訳ではない。学史的には、モース（1879）が注ぎ口のある土器の存在を観察したことを嚆矢とし、坪井正五郎（1891）は盃の如くに用いた物で飲料を口中に注ぎ込んだのであろう、と記している。高橋健自（1913）は、醤油注のようなものだが醤油注形土器では不適当なので急須形土器と呼んでいる、と記している。中谷治宇二郎（1927）は、下方に付けられる注口部の位置から実用的意義を離れた器形、と述べたが具体的な用途には触れていない。後藤守一（1943）は、注口土器は（お湯をわかすものではなく）酒を容れたもの、と記した。酒という具体的用途を述べた最初の文献ではないかと思うが、実は後藤守一（1927）は高橋健自の著作と同じ醤油注のようなものとも記している。その後再び後藤守一（1956）は、注口土器は液体を容れるものでその液体は果殻類をかんで作った酒の類であろうと述べた。

この頃は、土器の用途は推測するだけで確定することが難しいとしていた（杉山寿栄男1928）ばかりか、中谷治宇二郎は従来の土瓶形、急須形と呼んでいるが両者は容易に峻別できるものではなく、また本来の急須形とは何ら関係ないもので、恰もそのような用途を連想させる名称を止めて（機械的に）注口部を有する土器と一括して総称すると述べたが、その背景には当初からモースに始まる当該土器の注口部の存在を液体を注ぐものと当然視していたからであろう。当時既に朱を塗ったり、吊るす紐穴のある注口土器、人面付きの注口土器の存在が把握されていたり、壺形の注口土器が多いことなどが把握されていたために、中谷治宇二郎は実用的なものではないと考え、旧来の実用（日用）具とする意見に対して非実用具と考えた訳であるが、いずれも抽象的なものに終始した。1943年の後藤守一の意見まではそういう状態にあったと思う。それさえも酒を容れる、という観点が日用、非日用のいずれかとなると曖昧なものであるが、後藤守一は食器や煮沸する物ではないと記しているので、どちらかというと非実用具と考えていたと取れる。

江坂輝弥（1956、57）は、後藤説を実証的に一步進めて木の実酒のような特殊な液体を作り保存、飲用するとか発酵させる器具と見なした。青森県八幡崎遺跡の発掘で多数の注口土器を出土した土層からカジノキの木の実が多量に堆積していた事例から、この考えを更に発展させて神に捧げる果実酒容器説を展開した（1967）。この江坂説が、今日の一般的な説の主流をなしているものである。この他に、飲血儀礼、葬送儀礼と関連づける考え方（文献省略）もあるらしい。

このように注口土器の用途機能は、後藤守一や江坂輝弥に発する祭祀容器（酒器）説と酒道具説（山梨県立考古博物館1984）に大別される。これには、注口土器の普遍的な用途機能が全時期を通じて一定していたものなのか、それとも時期や地域によって異なっているものなのかという問題があり、鉢形系統から壺形系統に変化する問題や特定の時期の類例を捉らえてその器の全時期の用途機能を規定できるのかという問題さえ議論されていないし、類例の多寡に時期と地域による盛衰があるので一貫して合理的な説に見える推論にも無理が付きまとう。この問題は発掘による実証的事例に裏付けられてこそ論じるべきものなので、今後の調査研究に期待したい。

4 注口土器の様相

（1）草創期の注口土器（図1）

新潟県室谷洞窟から室谷下層式の深鉢形に注口の付いた土器が出土している。草創期中葉に位置付けられる日本最古の注口土器である。注口部は短いが、器壁との接点部分（注口部入り口）が平らに整形されている。この時期の類例はこの1点のみで、その出自の系譜等については不明である。

（2）早期の注口土器（図1）

北海道苫小牧市静川5遺跡（苫小牧市教育委員会1996）から、後半期の中路式の口縁部に注口の付

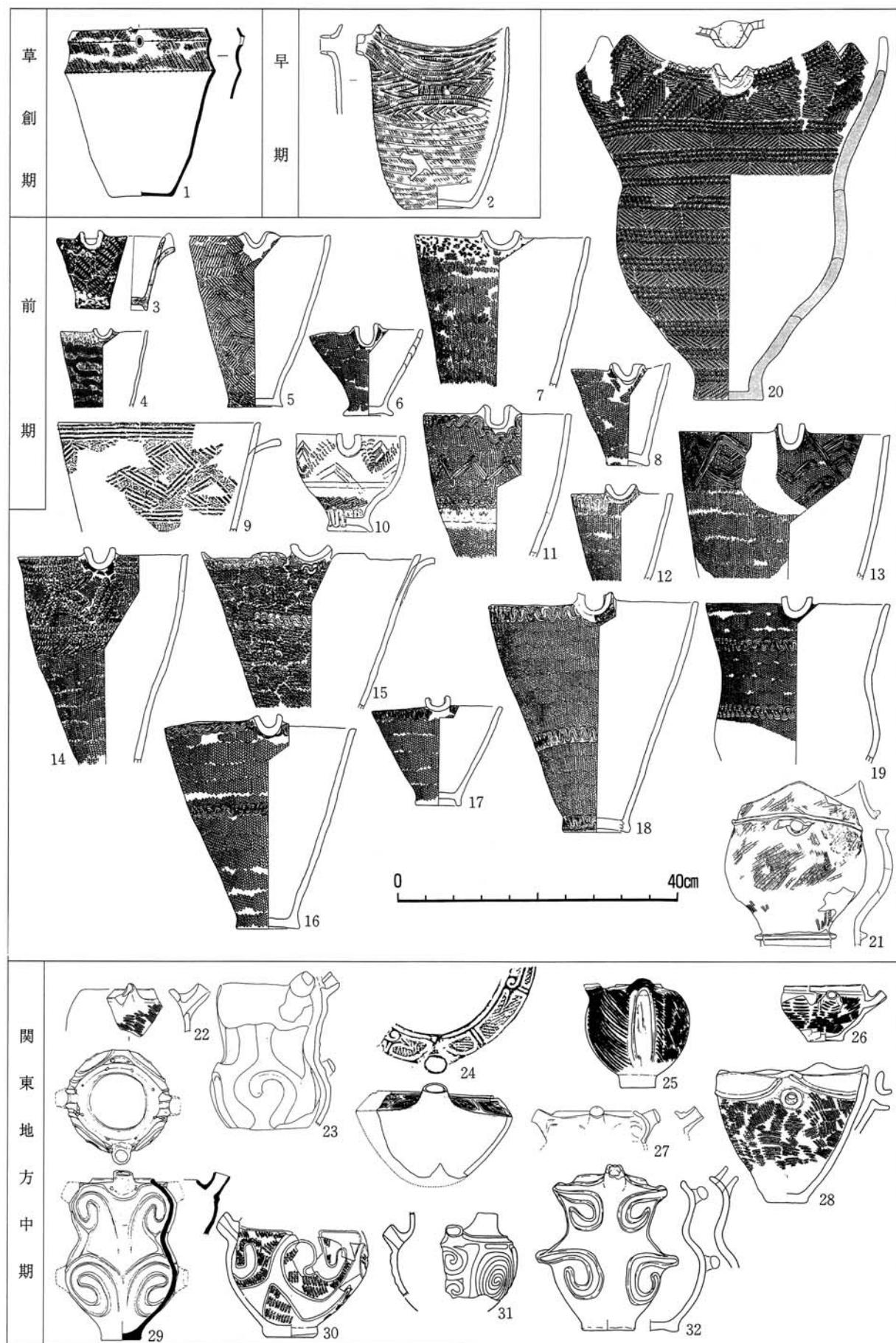


図1 草創期～中期の注口土器（片口形含む）

いた深鉢形が出土している。同市からは他にもニナルカ遺跡に類例が発見されている。熊本県大津町瀬田裏遺跡（緒方1991）の早期後半（押型文）の類例は、有孔のみで作り付けの注口部はない。

（3）前期の注口土器（図1）

北陸地方の前期前葉の福井県鳥浜貝塚には異形土器としての類例や片口形の木器が出土している。こういう遺存率の極めて低い木器具に例を見ることは、晚期にも新潟県御井戸遺跡に類例があるので木製品として相當に普及していたことを考えるべきであろう。

関東地方一円に分布する前期前葉の関山式には埼玉県大古里遺跡、井沼方遺跡などに集中的に類例が出土している。その系譜については不明である。現在のところ関東地方での最も古い類例である。基本的に深鉢形だが多少の器形変化が認められる。これらには片口形と注口形の2種があり、古手に片口形の方が多い。前期としては諸磯式にかけて器形変化が見られる時期なので、そういう一環の中でこのような器形が創作された可能性がある。当該期の類例には奥野麦生（1996）の研究がある。

東北地方南部では福島県塩喰岩陰遺跡から大型深鉢形の片口形土器が出土している。関東地方の関山式の範囲で捉えられ、その影響によるものであろう。

東北地方北部の前期末葉には円筒下層d式に青森県石神遺跡から浅鉢形の注口土器が出土している。両者共東北地方ではそれぞれ最古の類例だが、前後の脈絡は不明である。

前期の類例はまだ数量的には少ない。最古の注口土器である草創期や早期との系統関係も間に入る類例が不明だし、前期の類例が次の中期の類例にどのように繋がるのかも資料が少ないので不明である。いずれにしても、この段階までは生活上の必要性から各地で独創的にこの器形が創作されたものであろう。

（4）中期の注口土器

① 関東地方（図1）

比較的資料が出揃うのは中期に入ってからだが、前半期には殆ど見られず、僅かに初頭の五領ヶ台式に神奈川県金沢文庫遺跡で注口土器の破片を見る。栃木県梨木平遺跡では中期中葉の加曽利E1式新段階に類例が出土し、その後しばらくして栃木県御城田遺跡、群馬県空沢遺跡、神奈川県尾崎遺跡など一円に中期終末期の加曽利E4式になって類例を見るが、断続的なその系統関係は不明である。加曽利E1式新段階は大木8b式に平行するので、この点は東北地方の在り方と符合する。

中期末には類例が増加する。加曽利E4式と後期との系統関係を理解については丹野雅人（1985）、池谷信之（1990）の論考がある。この時期には無頸の広口壺形を呈するものと口径の広い鉢形と瓢箪形（瓠形）を呈する体部が屈曲した深鉢形の注口土器が出土する。特に、瓢箪形注口土器はその器形が特徴的で無文の地に微隆起線文の渦巻き文が施文され、東北地方南部まで分布範囲（図25）を持つが、無頸の広口壺形の存在は侮れない。

② 東北地方（図2、3）

東北地方では注口土器が一般的になるのは中期中葉になってからで、その先駆けは中葉の福島県法正尻遺跡の大木8a式の類例で、以後青森県石手洗遺跡、富ノ沢遺跡、岩手県大館町遺跡、柿ノ木平遺跡、高根遺跡、林崎館遺跡、山形県白須賀遺跡、宮城県永根貝塚、上野遺跡など、いずれも大木8b式の段階である。大木式土器の盛行した地域とその周辺部で、中期の注口土器は大木式土器様式において発達した器形であることは間違いないが、その周辺部に多いことは言わば異なる文化圏が接触した潮間帯（接触圏）地域にそれが派生した可能性があろう。その後の大木9式から中期終末の大木10式になると関東地方よりは類例が増加し宮城県、福島県に多い。宮城県大梁川遺跡では大木9式から10式に至る注口土器の変遷を理解することができる（図3）。大木10式後半期にはそれまで深鉢形が多かったことに対して小型や口縁部が内向する浅鉢形に変化することが重要である。逆に、深鉢形の瓢

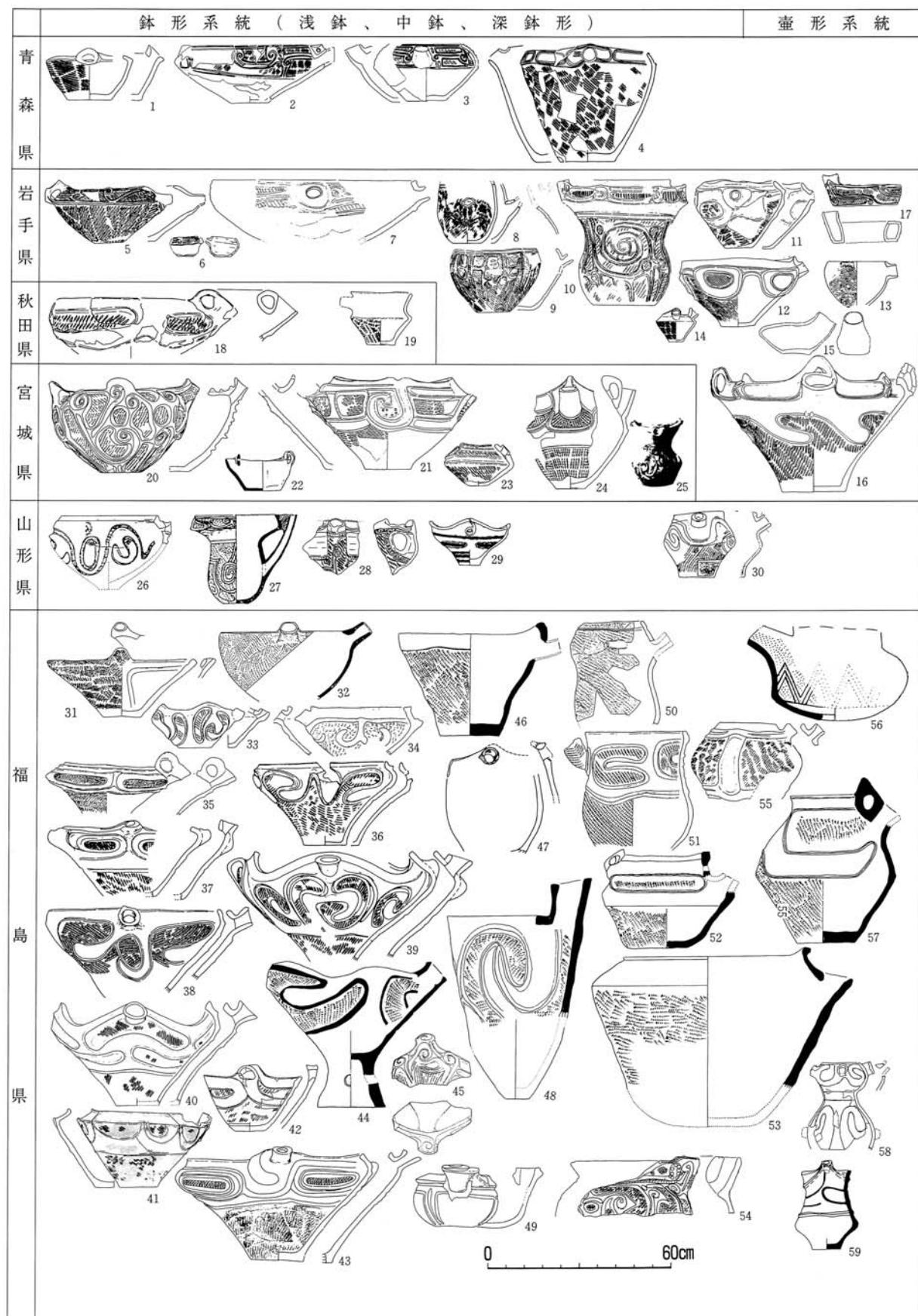


図2 東北地方中期注口土器

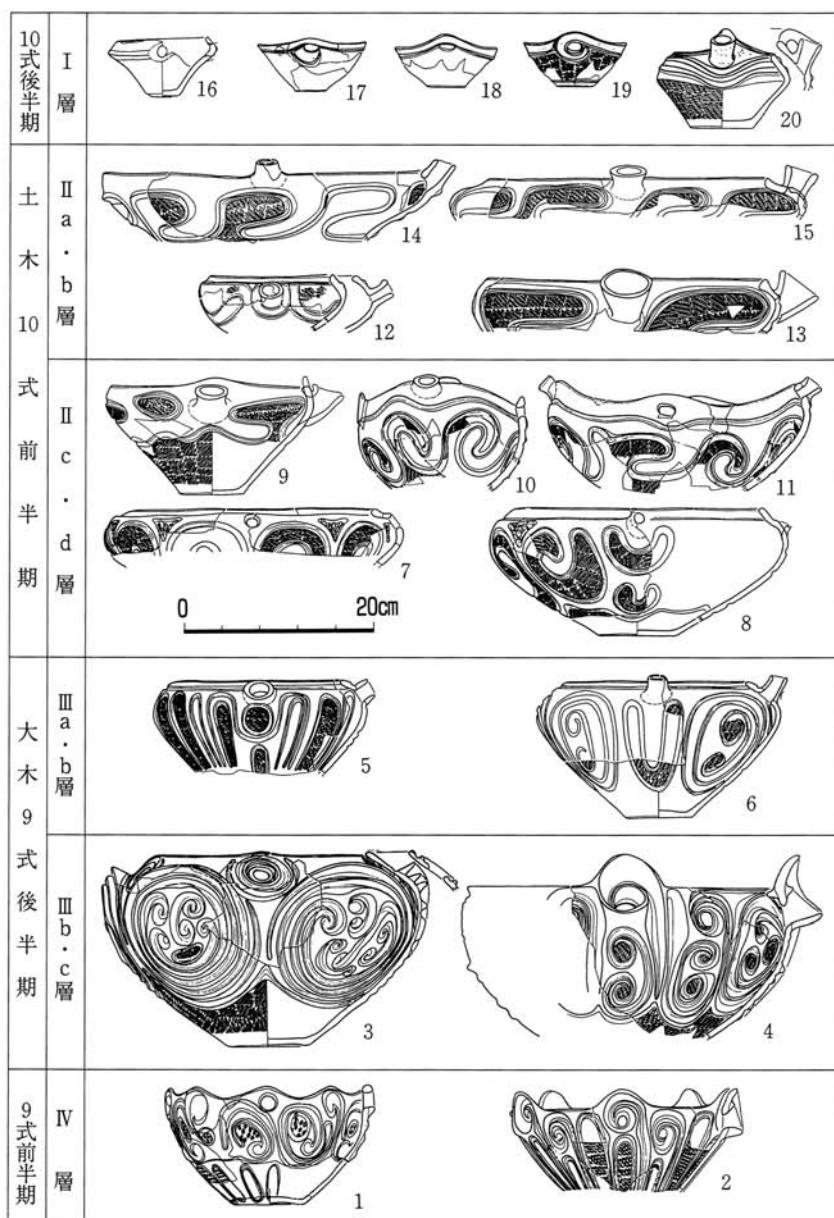


図3 宮城県大梁川遺跡出土注口土器

筆形注口土器が福島県北向遺跡から出土している。また、福島県田地ヶ岡遺跡の口縁部が外反し大きな把手を持つ甕形は注意してよい。中期の東北地方における類例は、それ以前とその後の注口土器の系譜を考える上で、それ以前では鉢形が基本で甕形の要素が加わることが重要である。

壺形の注口土器が宮城県幡谷貝塚の大木8b式にあるが、類例はまだ少ない。圧倒的に多いのは鉢形の注口土器である。鉢形の注口土器には浅鉢形、中鉢形、深鉢形がある。これに甕形、瓢箪形が加わる。以後、これらを鉢形系統の注口土器、壺形の類例を壺形系統の注口土器と呼ぶことにする。甕形のことを筆者は壺のような鉢形という意味で壺鉢形と呼んでいるが、鉢形の系統に入る。瓢箪形も同様である。中期の注口土器は特定の器形に限定されず、通常の土器（日常の生活容器）に単に注口部の付

したものであるが、山形県白須賀遺跡の深鉢形の注口部は特異な器形である。このことは、注口土器というものが特定の器形として生まれたものではないことを物語るであろう。強いて言えば、当該期に発達するキャリパー形の器形と関係することも考えられるが、この液体を注ぐに非機能的な器形ゆえに生じた役割を強調しても、中期の場合には当てはまってより古い時期の注口土器には該当しない。

中期末の注口土器を観察する際に、口縁部に付く把手の存在と甕形の器形を見逃すことができない。口縁部に注口部と接するように付けられる把手付き型注口土器は、現状では中期注口土器の最も古い段階である大木8b式から岩手県柿ノ木平遺跡（図2-5）に存在する。これは両耳壺の把手と係わり得る藤森説の有力な援用事例だが注口土器の出自とは関係ない。その把手には紐穴のような孔が空いていることが通有である。恐らく関東、中部地方などの中期一般に多い両耳壺などと関連する当該期の流行によるものであろう。いずれにしても口縁部に注口部が付くことが通有である。この把手付

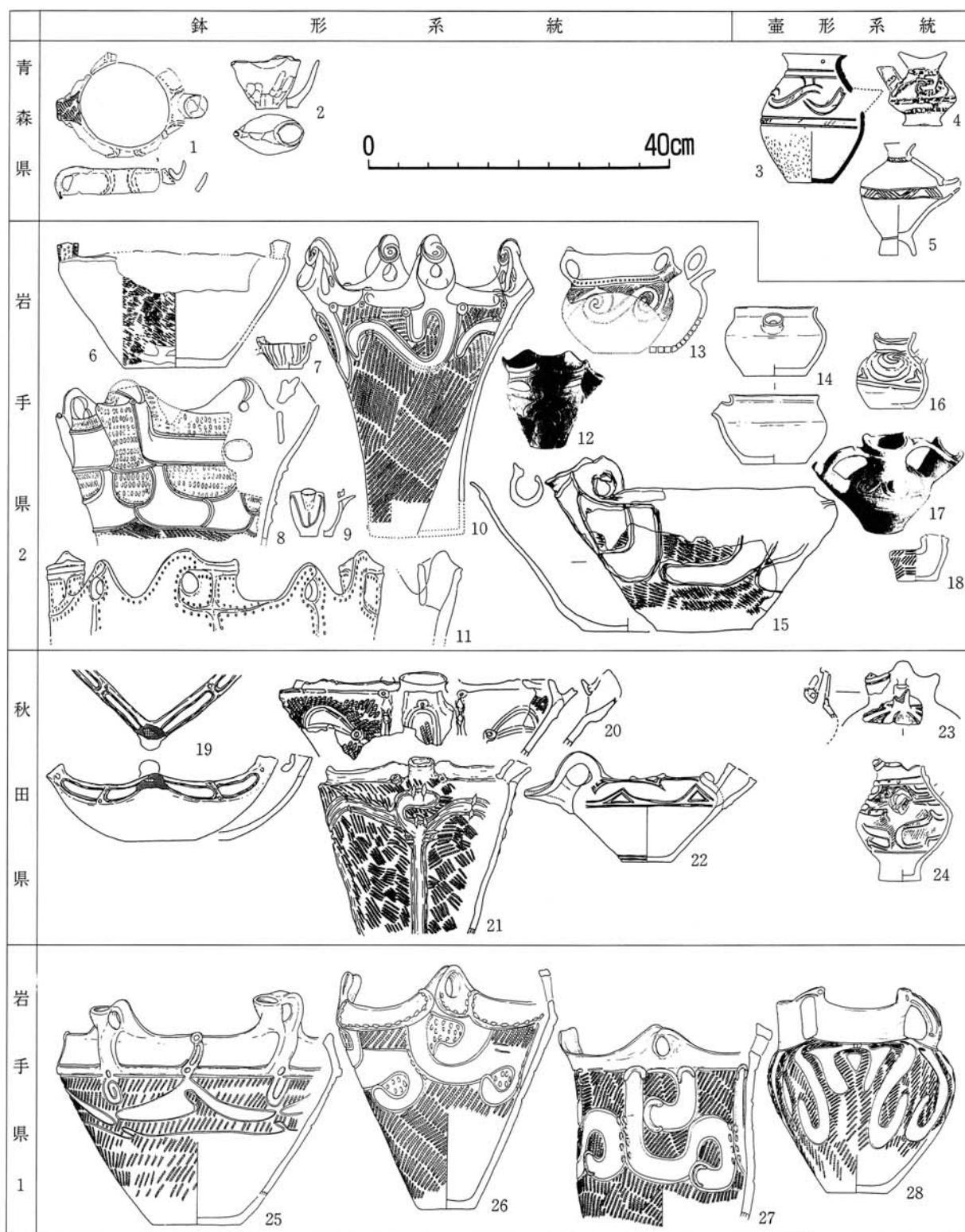


図4 東北地方北部の後期初頭の注口土器

き型注口土器は、大木10式を経由して後期初頭の注口土器或いは関東地方の後期に継続される最大の特徴である。瓢箪形には筒型の横向きの把手が付くのが特徴だが、それ自体は古くからある。また、注口部の付く位置にも特徴があり、例外的に体部や口唇部に付く場合があるが、中期の注口土器は原則として口縁部に注口部が付く。その他に、注口部が口縁部突起と一体化したものや、単に口縁部の有孔という形で文様化されたものなどが多い。

宮城県大梁川遺跡で層位的に把握された中期から後期に至る注口土器の変遷過程から、大木10式後半期から鉢形系統の注口土器の器形が中鉢形、深鉢形から小型化された浅鉢形、中鉢形に大きく変わることが分かる。この浅鉢形には口縁部が外向するものと内傾するものとがあり、後者の器形が東北地方一帯に分布し後期に引き継がれる。

(5) 後期の注口土器

① 関東地方

関東地方の前半期については池谷信之(1990)、鈴木徳雄(1992)、西田泰民(1992)らの研究がある。堀之内1式の注口土器の場合は鉢形系統の東北地方南部との関連性が強い反面、加曾利B式に代表される体部が球形を呈するものが現れるように器形形状から見た2種がある。後者は、池谷によると有孔鍔付土器から変化した在地的注口土器ということになるが、それは有孔鍔付土器の要素を取り入れたに過ぎない。有孔鍔付土器に捕らわれたために注口土器の鉢形と壺形の系統性が曖昧になった。鉢形系統に壺形や有孔鍔付土器の要素を取り入れて変容しても、元来鉢形から壺形の注口土器に系統が変わることはあり得ない。その間には錯綜した壺形の影響を見て取るべきであったと思う。端的に言えば、堀之内式、加曾利B式の球形体部の注口土器は、栃木県御城田遺跡、神奈川県尾崎遺跡の広口壺、千葉県江原台遺跡に発する壺形、瓢箪形の体部下半部の膨らみとが合体して関東地方の注口土器の独自性を表すもので、壺形の要素を取り入れていることにポイントがある。しかし、一見して壺形とも見られる土瓶形と称する球形体部の関東地方独特な注口土器は実は東北地方の影響に基づく鉢形系統をベースにするもので、壺形の要素は或る限られた時期に取り入れられた。ここに、東北地方を含めた汎東日本の広域な相互の編年と土器文化の係わり合いを考察する大きな問題があると考える。

その後の曾谷式になると注口土器の類例が少なくなり、安行式に至っては再び独自性の強い甕形ないし鉢形の注口土器が作られ地域性が顕著になる。

① 東北地方(図4~12)

後期に入ると東北地方には北部と南部の地域差が生じるようになる。類例も多く、前半期には相対的に関東地方よりは少ないとしても過少評価する西田(1992)の指摘は当たらない。同じ後期でも段階的な注口土器の発展の画期を捉らることができる。なお、編年は主に青森県の土器型式を使って説明する。

後期初頭の場合は、北部では青森県を中心とする十腰内1式と岩手県を中心とする門前式の二つの文化圏にそれぞれ特徴的な注口土器が知られる。青森県では幾分門前式の影響による鉢形注口土器が見られるが、岩手県北部にかけて当該期に通常見られる壺形に注口部を付けた注口土器が特徴で、その場合の注口部は体部に付く。これに対して岩手県、秋田県にかけては深鉢形の口縁部に注口部が付いたものが多い。いずれにしてもこの地域はごく一般的な通常の器形に注口部を付けた注口土器の範疇を出ない。岩手県には宮城県方面の注口土器がもたらされる。

東北地方南部の場合は、南境式に比較的纏まった類例が存在する。分布の主体は宮城県、福島県だが、一部岩手県貝鳥貝塚、秋田県藤株遺跡に知られている。器形を見ると深鉢形や壺形は見られず、殆どが浅鉢形、中鉢形の鉢形系統のものとやはり鉢形系統の仲間である甕形とがある。浅鉢形、中鉢形の区別が付けてにくいので浅鉢形と総称するが、その浅鉢形は口縁部が短く内傾しそこに注口部が付いたものである(a類)。この浅鉢形を基本形とし体部の屈折が体部中央に位置する甕形(b類)、屈折部が体部上半部に位置する壺形に似た甕形(c類)、鉢形系統(浅鉢形)の3つの類型と口縁部が屈折して外反する甕形に似た壺形(d類)があり、こういった要素が統合されたものがe類である(図)。このような鉢形系統を主体にした4つの類型から当該期の注口土器が形成されるが、細分は可能だ。e類はあたかも無頸壺に見えるが鉢形である。特に注意されるのは六反田遺跡や二屋敷遺跡などに見

られる口縁部が内傾したり体部が丸みを帯びる鉢形と、鉢形の口縁部に付く大型な把手である。この把手と注口部の位置関係には、大型な把手の部分に注口部が付く場合と大型な把手との間に注口部が付くものとがある。以後前者が継続される。また、注口部が浅鉢形、中鉢形には概ね口縁部に付くのに対して、体部が丸みを帯びる鉢形の場合は体部上半部に付く時間差を表す特徴が見られる。これらの関係は関東地方とも関連し、後出して把手と注口部が分離する。

また、注口土器に研磨手法による鉢形系統（浅鉢形）が岩手県、秋田県に出土している。この器形は中期末葉の宮城県大梁川遺跡の大木10式の類例に端を発するものであろうが、アヒルの嘴状の大型把手を付ける（白長根館型）。これは中期に始まる鉢形系統注口土器の終焉である。大木式の縁辺部地域（土器文化の潮間帶）に存在する。これは後期中葉に近いものでその直後の中葉の宝ヶ峯遺跡に多い研磨注口土器（宝ヶ峯型）の素型をなすものと思う。

後期前葉は北部の編年では十腰内2式から丹後平式を経て3式が相当する。この時期には東北地方一帯に非常に特徴的な無文研磨の手法による注口土器が発達する一方で、磨消繩文を施文する注口土器が平行して存在する。無文研磨の手法による注口土器は従前とは違って壺形、甕形を基調とするもので、その後の東北地方における後期ないし晩期注口土器に至る系統性（系譜）を考える上で極めて重要であると考えているので、その出自と消長発展の系統を明確にする必要性がある。大木式の系統を引く門前式に基づくものだが、対象の幅を広げて考える必要があろう。

特に、当該期の注口土器の主体が研磨手法による壺形と磨消繩文による壺形と甕形、すなわち鉢形系統から壺形系統に分離された注口土器類型の2種が成立形成されることが注目される。新たに鉢形系統には青森県、岩手県に台付鉢形の浅鉢形注口土器が十腰内2式の前半期に出自する。これは台付鉢形で注口部の位置が口縁部にあるので前段階の系譜を伝統的に引いていることが分かる。鉢形系統の甕形の場合は前段階では注口部の位置がまだ口縁部付近にあったが、この段階になると体部上半部に移る。同じ甕形でも東北地方北部と南部では文様構成が違うので平行関係にあるとしても型式が異なり、北部の場合は十腰内3式である。

圧倒的に多いのが壺形系統の注口土器である。東北地方北部の類例は青森県、秋田県に見られる十腰内2式のa類は口縁部が「く」の字状に内傾し底部が平底で底辺部が少し立ち上がるものである（大湯型）。これに似た類例の分布範囲は福島県などと広い。最も類例の多い研磨注口土器は宮城県宝ヶ峯遺跡に多く知られているので宝ヶ峯型と称したい。これはほぼ東北地方全域と関東地方北部（茨城県）に類例が出土していて、当該期の注口土器を最も特徴づけるものである。一般にこの宝ヶ峯遺跡の出土土器は広義の宝ヶ峯式と言われているが、宝ヶ峯型にはいくつかの階級があるものと思っている。この宝ヶ峯型には幾つかの特徴があり、口縁部形状では外反するもの（a類）、内湾するもの（b類）に区分され、a類には口頸部が2段に膨らんで多段化するもの（a2類）とそうでない単純に外反するもの（a1類）がある。底部の形状も特徴的で平底、丸底、底辺部に屈折の段を形成するものなどがある。この注口土器には全て沈線文による入組み帯状区画文が施文される。このように幾つかの特徴は一型式の範囲に収まるものではなく、青森県の編年では十腰内2式から丹後平式までの範囲で捉えられ（鈴木克彦1996）、一部は十腰内3式まで渡る可能性がある。恐らく宝ヶ峯式というのもそのように細別されるものではないかと思う。いずれにしても精巧な作りと光沢をもち、朱塗りなどがある。

この宝ヶ峯型の器形を特に注意するのは、後の東北地方の後期、晩期の注口土器の形態を規定する型（a類=型、b類=型）をこれに持っているからである。この研磨手法の宝ヶ峯型には磨消繩文を施文する注口土器が共伴することが丹後平式として判明している。この宝ヶ峯型の出自は上記したように十腰内2式前半期にあるであろうから、十腰内2式古手（2a式と表記）の大湯型、白長根館型

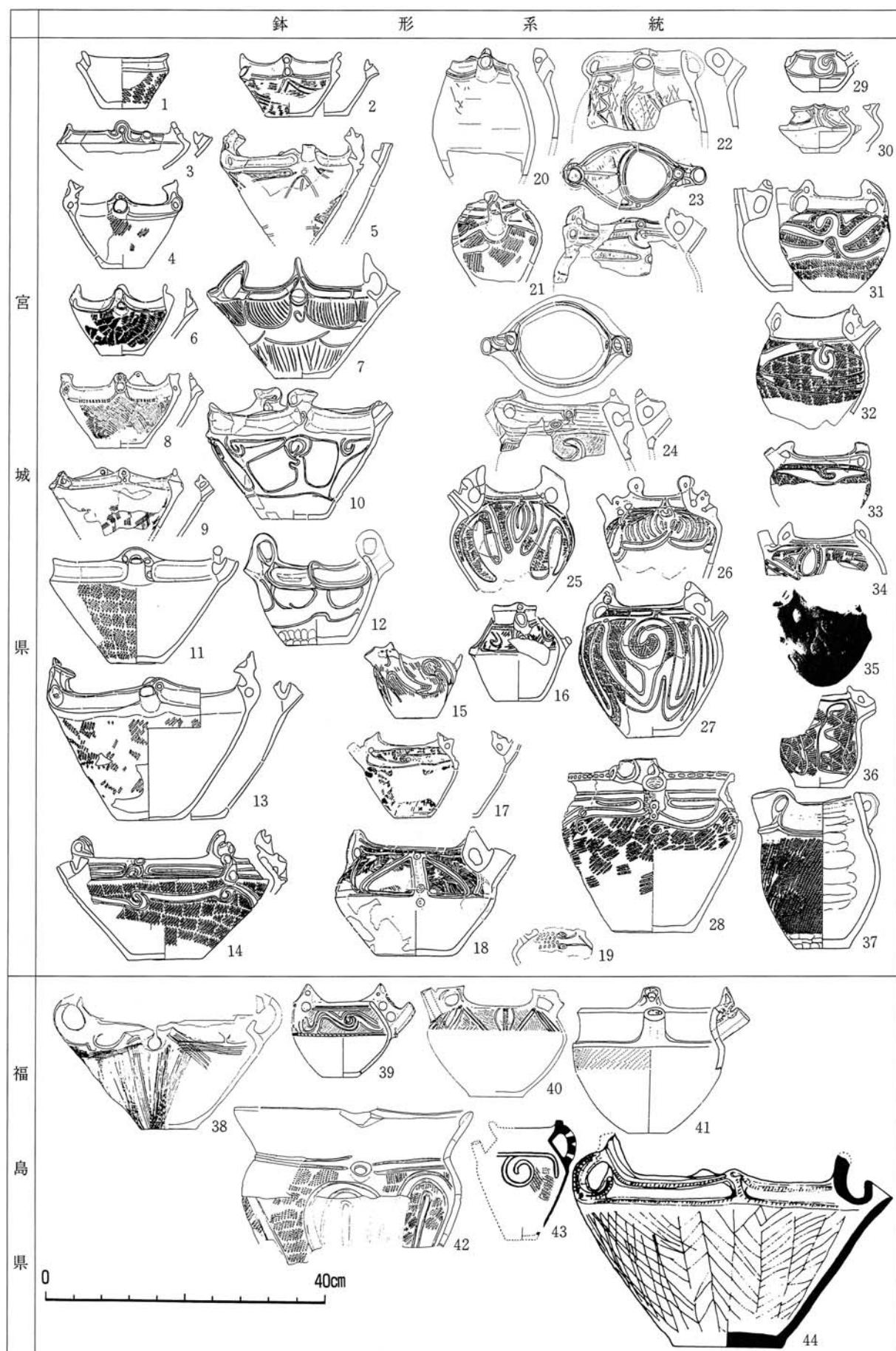


図5 東北地方南部後期初頭の注口土器

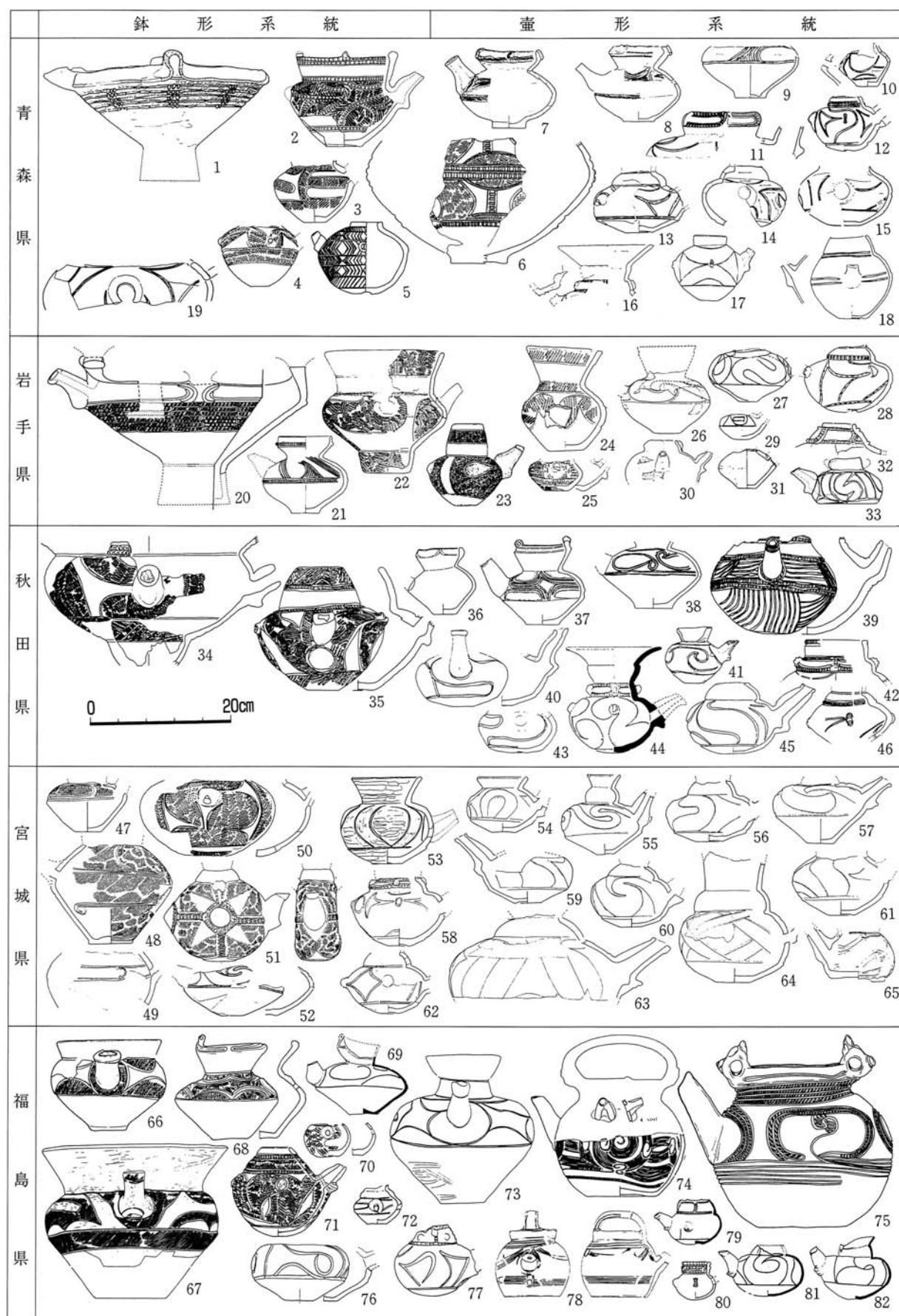


図6 東北地方後期前葉の注口土器

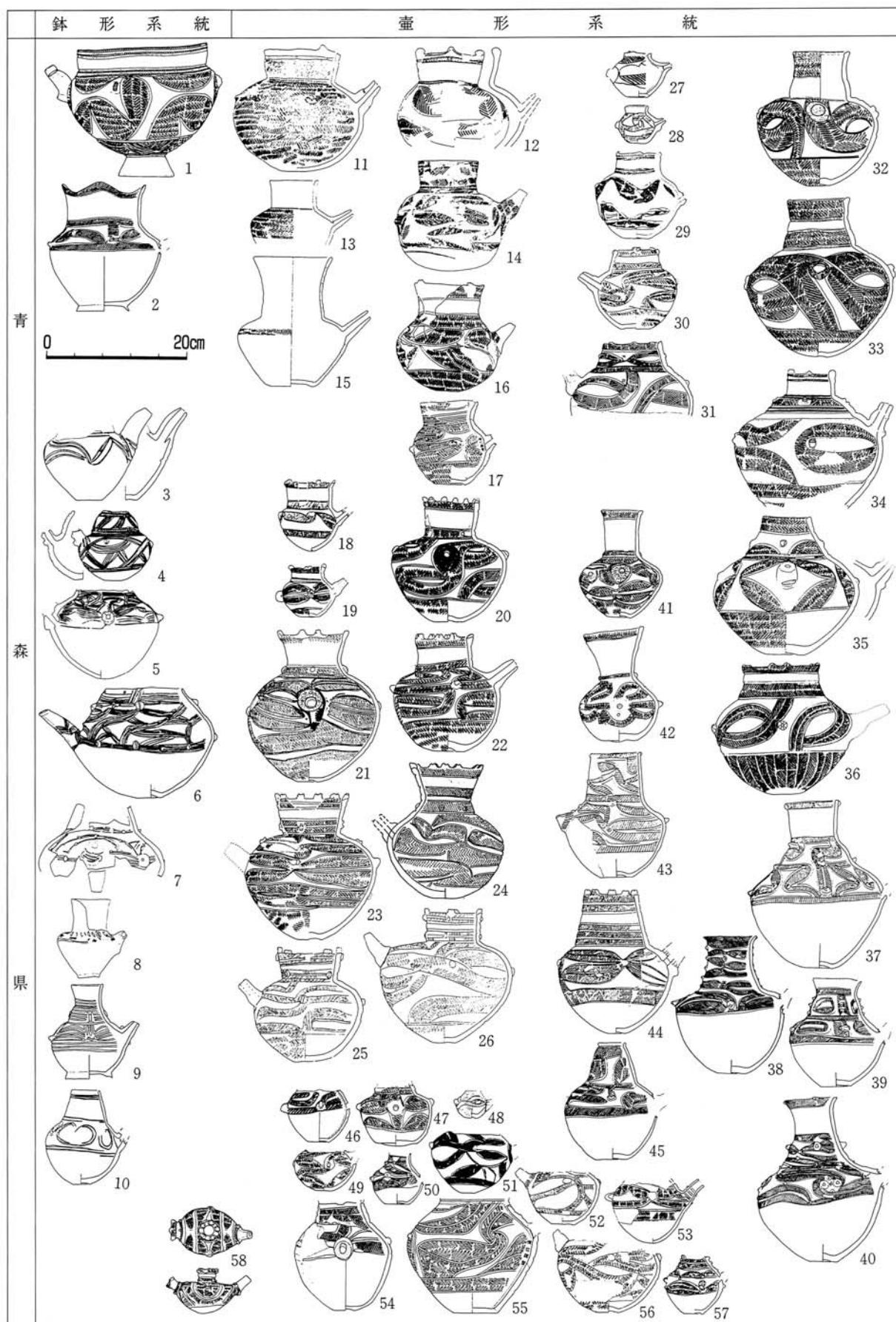


図7 東北地方北部（青森県）の後期中葉の注口土器(1)

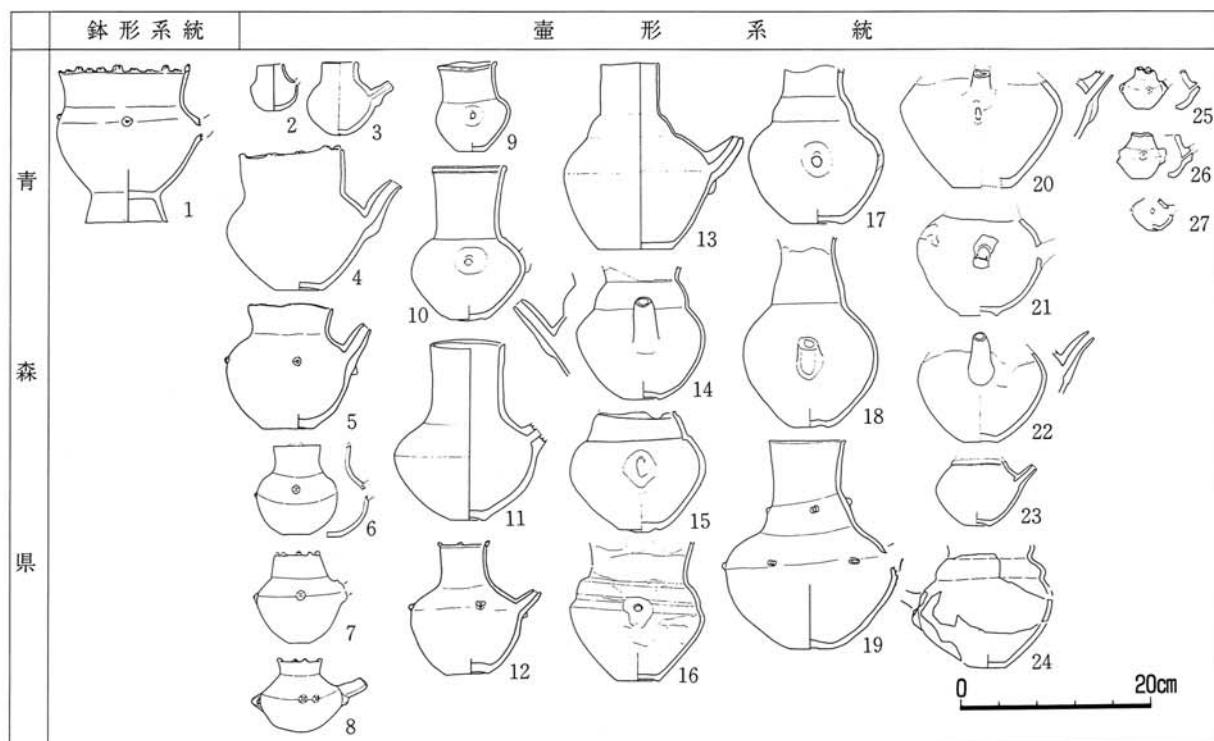


図8 東北地方北部（青森県）の後期中葉の注口土器(2)

と平行（共伴）関係にあるもの、その新手（2b式と表記）に相当するもの、更に丹後平式に共伴するもの、という少なくとも3段階ないし十腰内3式にもその可能性がありうるので3～4段階が存在するであろう。宝ヶ峯型には把手が付かない。しかし、白長根館型にはアヒルの嘴状の把手が付いていた。両者は文様の施文手法やモチーフは類似するものがあるが、器形が大きく異なる。

宝ヶ峯型の口縁部が外反するもの（a類）と内湾するもの（b類）の2種には、底部の形状から平底、丸底の他に底辺部が立ち上がり気味のものなどがあり、同じく文様構成もまた類別する要素になりうる。文様を型式判別の要素とする時には前段階の横位方向を示す区画曲線文がより古い文様構成を示すものであろう。体部は一般に丸く球形を呈する。さて、口縁部が外反するa類には短い口縁部が直立したり外反するだけのもの（a1類）と多段化して口縁部、口頸部が分離するもの（a2類）がある。a2類には口頸部が2段になるものもある。底部には平底と丸底があり、両者に上げ底がある。底辺部には立ち上がり気味のものや屈折して稜線が付くものなどがある。平底と底辺部が立ち上がり気味のものの方が古手で、後出のものが丸底だと思う。丸底には中央が窪んで上げ底（凹底）になるものなどがある。口縁部が内湾するするb類は現状では全て丸底を呈する。このかぎりでは宝ヶ峯型は当初からa類、b類が共存したのではなく或る段階からb類が出自したことになるが、この点はa類の出自問題と含めて今後の課題である。現状ではこの宝ヶ峯型は文様からは或る程度の系譜を理解できるが、恐らくは十腰内2式古手の大湯型と十腰内2式か直前の壺形注口土器をベースにして発達したものではないかと考えられる。特に、b類は大湯型を更に内湾させた場合に派生する形態ではないかと考えるし、a2類はその大湯型と通常の壺形注口土器が合体して生じた形態の可能性がある。

東北地方南部の福島県には土瓶形と称される体部が球形の堀之内式に多い注口土器（堀之内式型）が存在する。これには棒状の橋状把手と大型の把手が付くものとがある。前者は関東地方に多く、東北地方では福島県において他に類例は秋田県にあるだけである。関東地方からの影響によるものと搬入品の可能性がある。このように当該期の福島県は複雑な様相を示し、この地域は地理的な位置関係から関東地方と密接な関係を伝統的に保つ傾向がある。

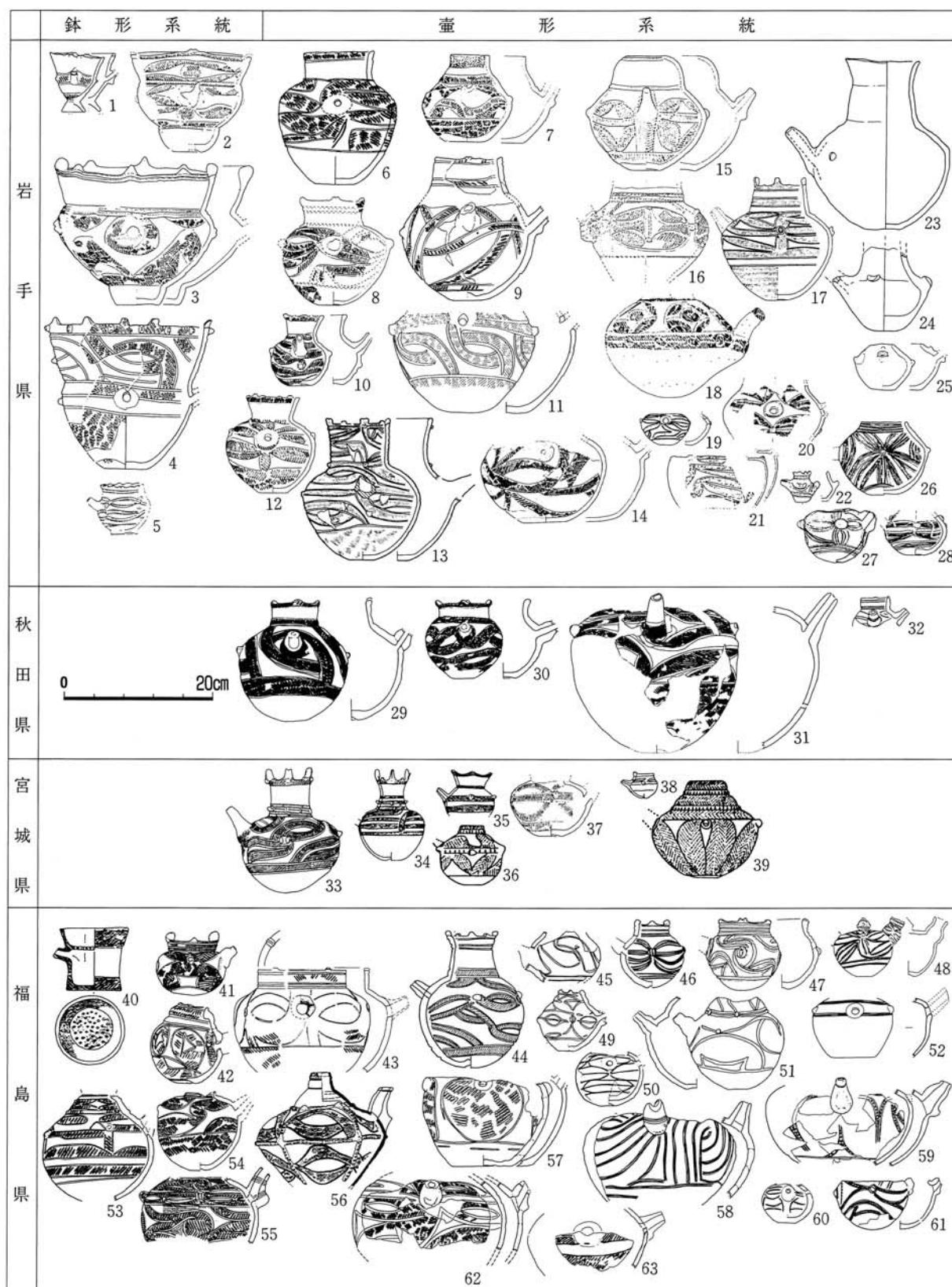


図9 東北地方の後期中葉の注口土器

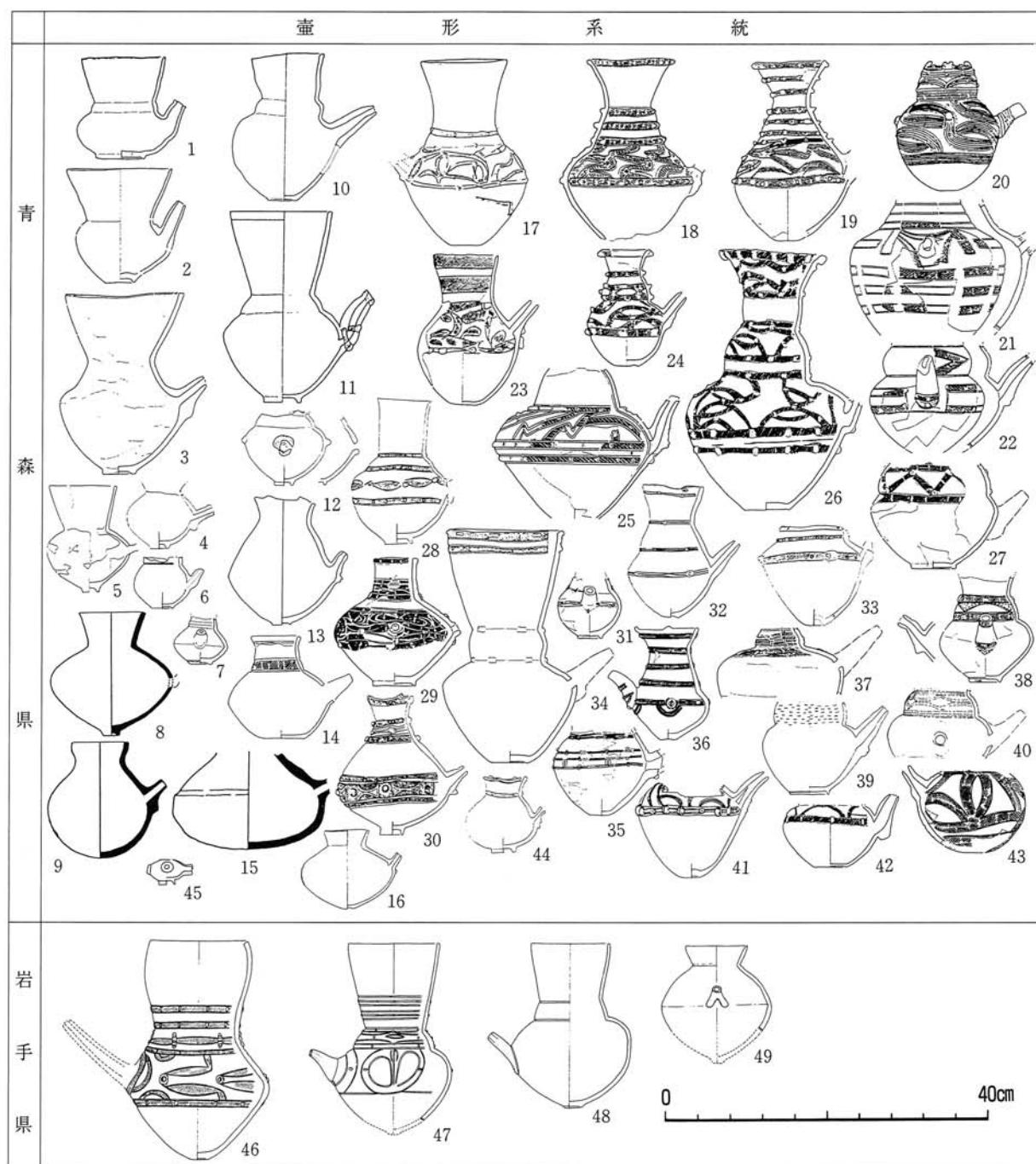


図10 東北地方北部の後期後葉の注口土器(1)

後期後葉になると、注口土器の多寡に地域差が著しくなる。現状では青森県に圧倒的に多くなり、次いで岩手県、福島県と続き、その中間地域に少ない。青森県の編年では十腰内4、5式に相当する時期である。青森県では無文注口土器が多いが、一般的には入組み帶状（磨消繩）文を施文する壺形注口土器が主体を占める。通常の壺形と壺形注口土器の器形が全く同一なために破片資料からでは判別が困難である。図化されたものを集成したが、そのような事情から類例はもっと遙かに多くなることを想定してよい。通常は体部が丸みを帯び、底部が丸底を呈する。口縁部ないし口頸部と底部形状と施文される文様モチーフをよく観察することによって型式判別することができる。とりわけ、当該期の類例には櫛掛け状入組み帶状文の磨消繩文を施文するものが汎東北地方一体に分布し、それぞれ平行関係にある北部の十腰内5式、南部の西の浜式という具合にそれらは一つの型式学的なキータイ

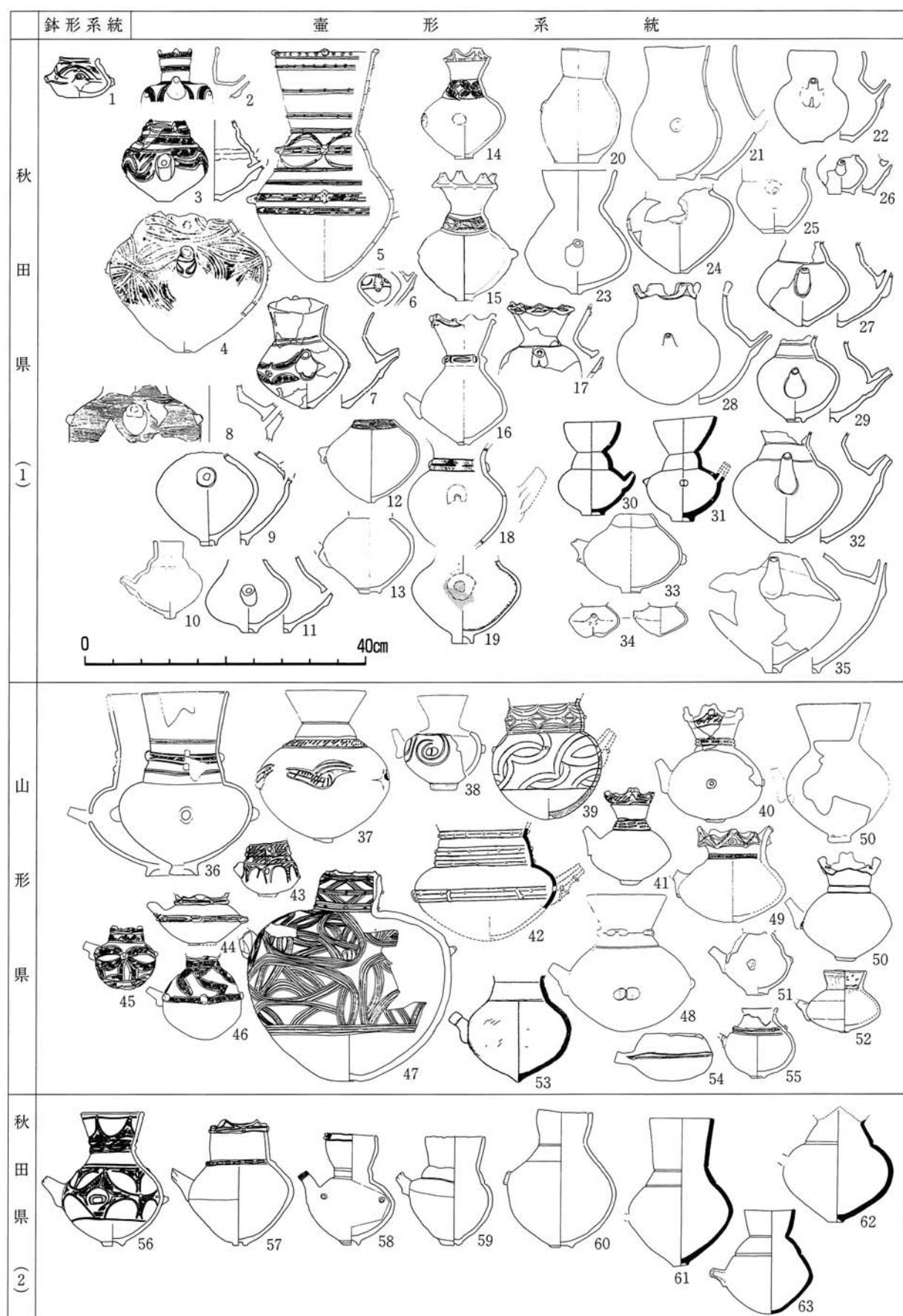


図11 東北地方北部の後期後葉の注口土器(2)

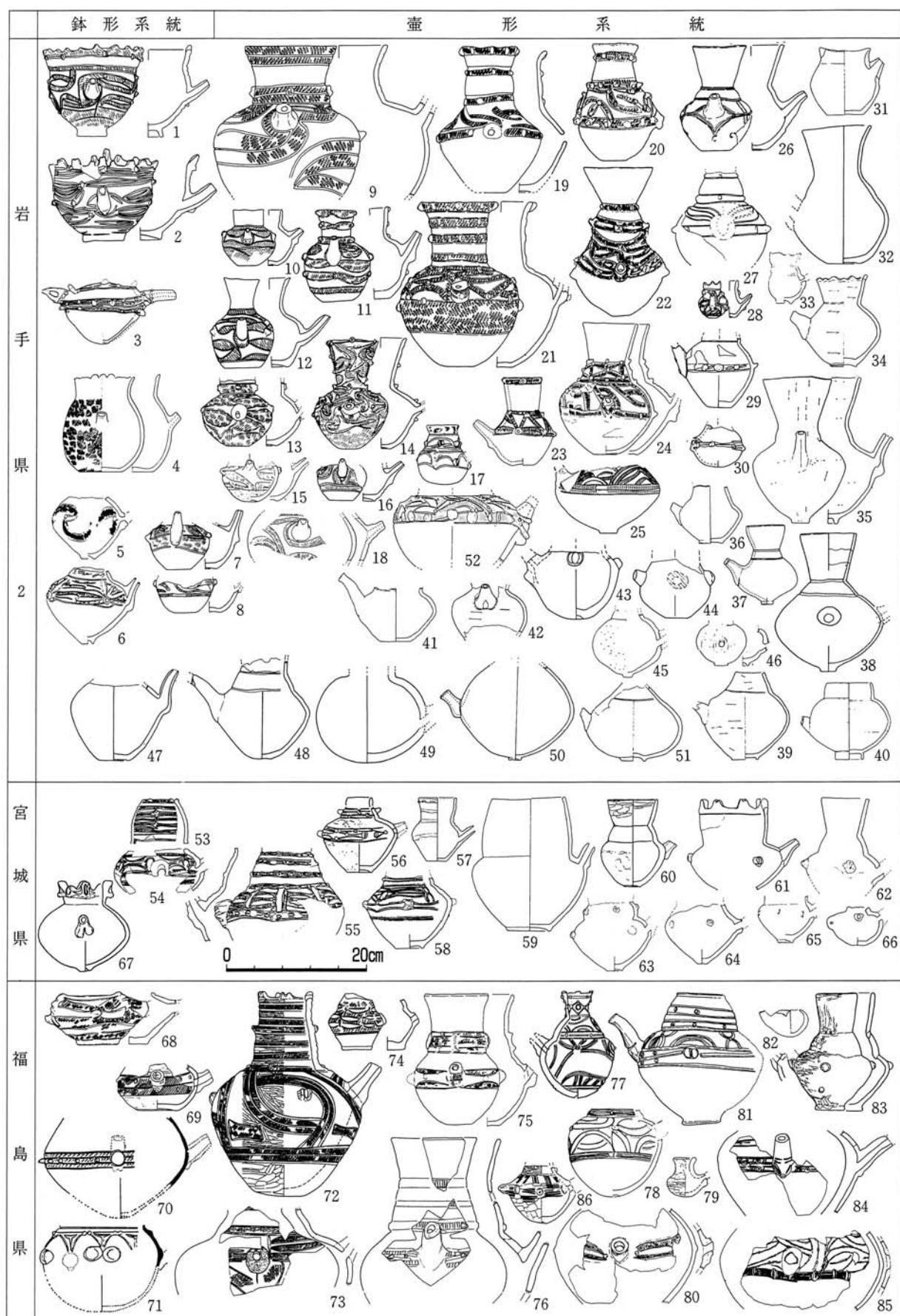


図12 東北地方の後期後葉の注口土器(3)

普になりそうだ。ただ類例が多い割りには層位的な共伴関係を捉えられている場合が少なく、研究の余地がある。前段階同様に山形県の類例があまり知られていないために多少の問題を残すきらいがあるが、福島県では相対的に無文研磨やみみず張り状文の文様を施文する類例が多いような気がしている。

後期末葉は青森県で風張式、大湊近川式、十腰内6式が相当する。この6式は後期ないし晩期ともされるが、この辺の事情は主論から外れるので説明しない。前段階とは打って変わって東北地方全域に資料が存在する。福島県を除いて全体に無文注口土器が多いが、それはほぼ6式に集中する。6式以外では一貫してそれは青森県に多い。長く開く口縁部形状を特徴とし、青森県などの東北地方北部に平底が多いのに対して山形県などの南部に丸底が多いきらいがあるが、口縁部形状は概ね前段階の系統を引きながらも特に底部形状は特徴的である。つまり、丸底、尖底に近いもの、底部が窪むもの、高台状の台部、中央が窪んだ小さな突起状の底部など非常に多様性が伺われる。その一方で施文される文様自体には地域差が強い。この編年は晩期注口土器との関係において重要で、今後の大きな課題である。

ここでは晩期注口土器を考えるうえで看過できない資料を明記しておきたい。それは秋田県中山遺跡の無茎の注口土器（図9-1）、山形県の体部が円盤形を呈する器形の注口土器（図9-41）、福島県外出遺跡の体部が算盤形を呈する注口土器（図10-54）の存在である。当該期の注口土器は押しなべて体部が球形を呈するものが定型であった。それに対してその類例は相入れない器形を示す。晩期との関係で言えば、丸底、球形の体部が共通していて、その違いを旬別することが極めて難しい程に一線を画すことができかねるのが実態だが、そう言った中に後期としてはアノーマルな器形ながら、晩期注口土器の器形の一側面を体する突然変異的な器形が当該期に存在する。恰も前後の脈絡を越えた所で新たな器形がサイレントに創作されるという可能性を指摘したい。

（6）晩期の注口土器

① 関東地方

関東地方には晩期初頭の球形体部の注口土器が知られているが、類例は少ない。それは東北地方の同時期と同じ形制にある注口土器である。少ないながらも広範囲な分布を見る。その後は、東北地方の注口土器が搬入されたり、東北地方の注口土器をモデルにした模倣注口土器が作られる。歴史的にこの問題は亀ヶ岡式の南漸、北漸論の論争史に代表される別な問題があるので割愛する。

② 東北地方（図13~24）

一般的に急須形として知られている亀ヶ岡式の注口土器は、後期の壺形注口土器の系譜を引くものである。厳密に後期と晩期の注口土器の境界を区分することは難しい。最終的な決定は形式論と共に発掘による層位的出土や共伴関係の観察によって行わなければならないが、形態と文様から類型化を図った上でそれを層位的に確認することも一つの方法である。ただし、詳細な後期末から晩期初頭の型式編年が確立しているとは言いがたい現状では、当座晩期の注口土器の概念を規定する作業が必要である。しかしながら、後期末と晩期初頭の注口土器は無文が多く、瘤付きの有無以外には明確に規定することが難しい。例えば、底部の小さな突起、高台状の台部は、基本的には後期の特徴だが晩期に残る。小型化、体部が丸みを呈することや三叉文が施文されるという点では同じものが後期にも存在する。この時期の境界に位置付けられる特徴的な注口土器に体部の丸い球形注口土器がある。この器形は、極短い期間に広範囲な分布を示すが、これの存在を以て晩期の開始とされる（須藤隆1992）ことが多い。しかし、その出自過程やその後の系譜（影響）については分かっていない。分布はやや東北地方南部に多いきらいがある。

晩期注口土器については、主として文様と形態から大洞諸式に伴う注口土器の特徴を、口縁部が内

傾するA型、口縁部が外反するB型、壺形のC型に形態分類した藤村東男の系統的な研究がある。また、九年橋遺跡の出土例から例えば大洞C2式に多様な文様を施す注口土器があることを明らかにした。このことは重要なことだが、この機械的な分類はどれがA型でどれがB型かは大した問題ではないかもしれない。しかし、晩期のそれが後期の継続だとすれば相互に意味合いを持たせた方が解りやすいと考え、藤村東男のA、B型を逆にした方が適している。つまり、後期には初めA型が一般的で或る段階からB型が出現する。これにC型、D型を加えたが、C型は藤村東男の分類とは違い壺形に近いものではない。筆者の分類法は中谷に基づく注口土器の体部形状を区分しその各形部の合体が晩期注口土器の系統的な形態的変化を順序立てているとするもので、一見して分かりやすい藤村東男の分類法は大洞B式には適しているが、その後の大洞BC、C1式以降の類例を見ると細部にわたる器形変化に見落としが生じたり、曖昧になると見えるからである。A型は晩期を貫通して主流をなす。概ねB型は大洞BC式まで、C型は大洞B～C1式、D型は大洞BC～C2式に主体となるように、細別時期によって類型が段階的に変遷することと、一貫したA型と時期別差異の著しい類型とが並立的に存在する構造が見られる。更にこれに細かな地域差が加わる。それは各県位の単位で見ることもできるし、岩手県東裏遺跡に代表される比較的狭い型の地域差などがあるが、ここでは詳述する余裕がないので、最大範囲の地域性について明らかにしておく。

図23は東北地方の北と南を大別したものだが、後半期になるに従って南部に注口土器が多くなり、北部に前半期の類例が多いことを示す。注口土器の多寡にこのような逆転した変化が起こる理由の一つに土器製作上の専業化の一環として九年橋遺跡の存在が介入していると思っているが、それだけでは解決できる問題ではない。

藤村東男（1988）は大洞C2、A式の注口土器に各々数段階があることを指摘したが、このことはそれ以前の類例にも当てはまる。この細別をそのまま型式差とすることはできないが、大洞式の型式細分を示唆する問題である。

（7）弥生時代及びそれ以降の注口土器

弥生時代の注口土器については、関東地方で栃木県柴工業団地内遺跡、東北地方で福島県天王山遺跡、青森県砂沢遺跡、宇田野2遺跡などに類例が知られている。注口土器ないし片口形は、北海道の後北式土器において顕著である。関東地方以北には土師器、擦文土器にも片口形の類例がある。

5 注口土器の編年 ——類型分類とその系譜、編年等の諸問題——

（1）注口土器の類型分類の基準

注口土器の研究に果たした中谷治宇二郎の功績は、その全体を網羅して実態を明らかにしたことと形態に基づく類型化を図ったことである。多少順序が逆転した部分があったとしても、もっと発展的に論じ高めるべきものであった。当時既に中期の類例の2、3が知られていたが、その実態が不明確なために特に分類立てをしなかったらしく、よく知られていれば当然それがA型になったであろうし、その後の研究が進めばこの記号類型（の内容）は当然改定されたであろう。藤村東男の分類も機械的なもので後期と晩期との間に整合性、連動性はない。晩期の注口土器は後期の注口土器と密接な関係を持ちながらも独自な形態を持って発達したものであることが述べられているので、相互の連動性を求める必要がなかったと考えたのかもしれないが、機械的な分類ゆえの帰結である。筆者はその機械的分類（類型化）に意味合いを持たせることを意図した。その発想は、晩期粗製深鉢形で述べたこと（鈴木克彦1996）と同じである。こういった機械的な分類に終始しては混同をきたしかねない。だからという訳でもなかろうが、注口土器は「○○式の注口土器と呼ぶことが正しい」とされたことがあった。しかし、筆者は必ずしもそのように考えない。日本全体の注口土器を時期毎の機械的分類に終始するの

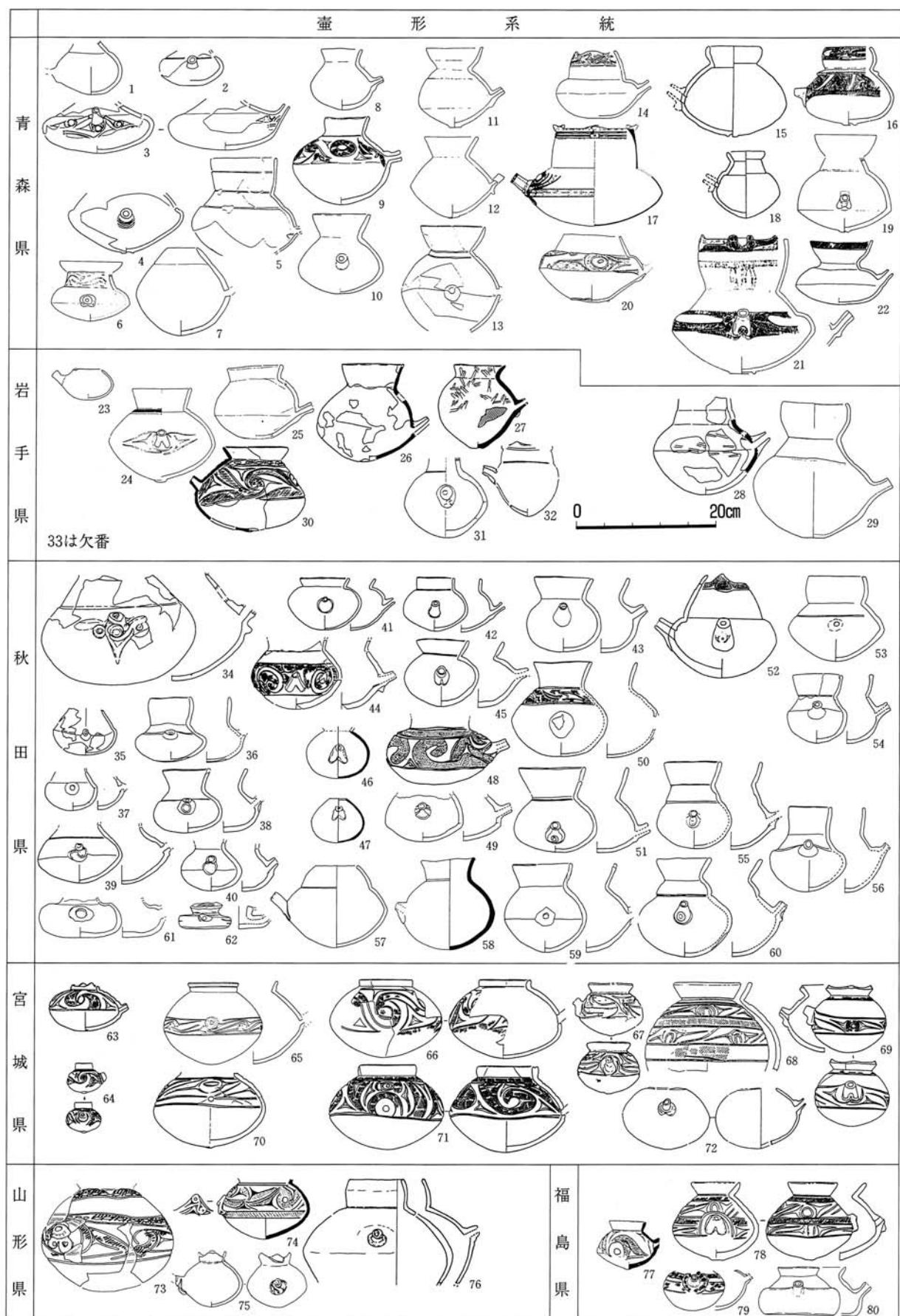


図13 東北地方の晩期初頭の注口土器

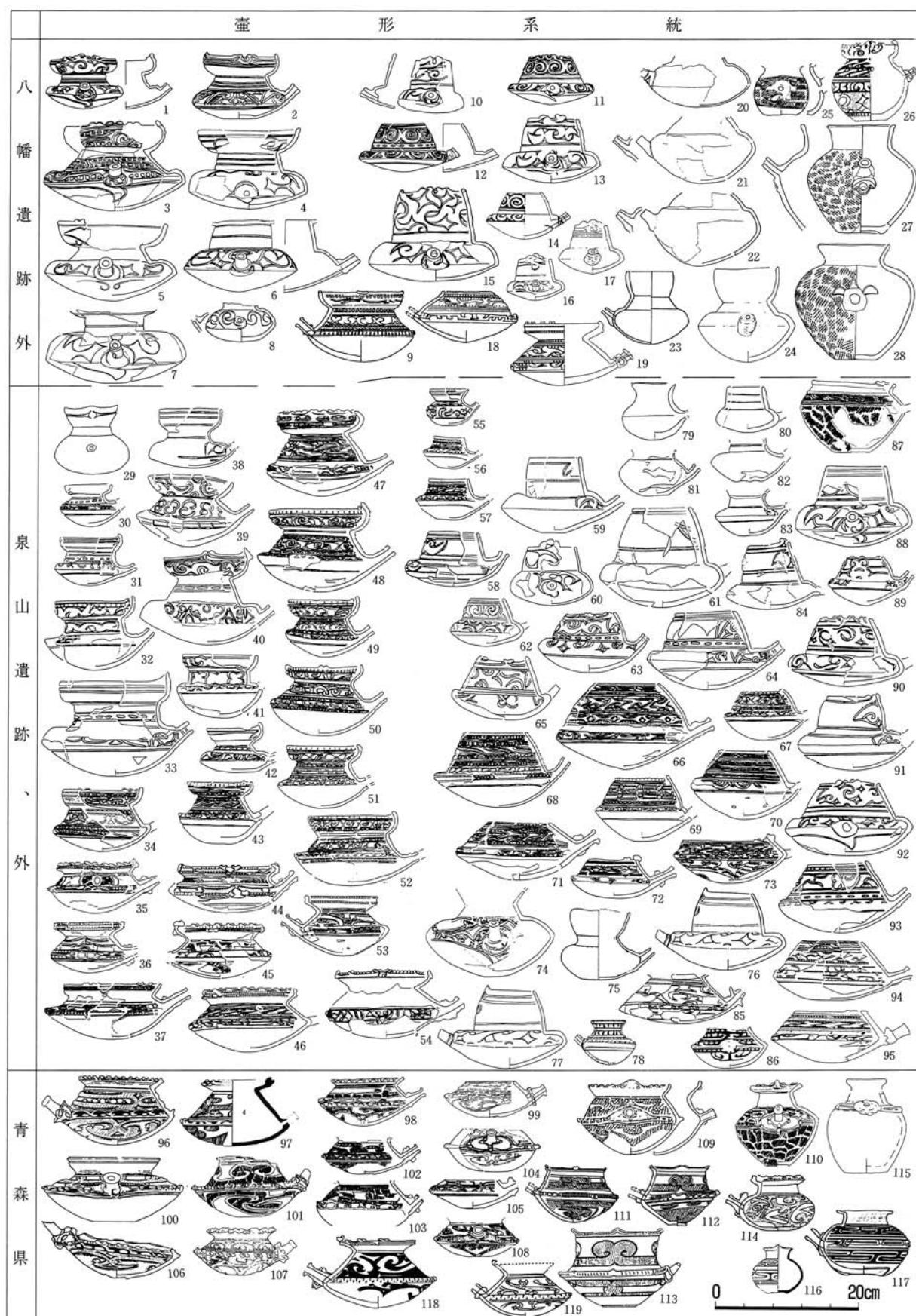


図14 東北地方の晩期注口土器（青森県1）

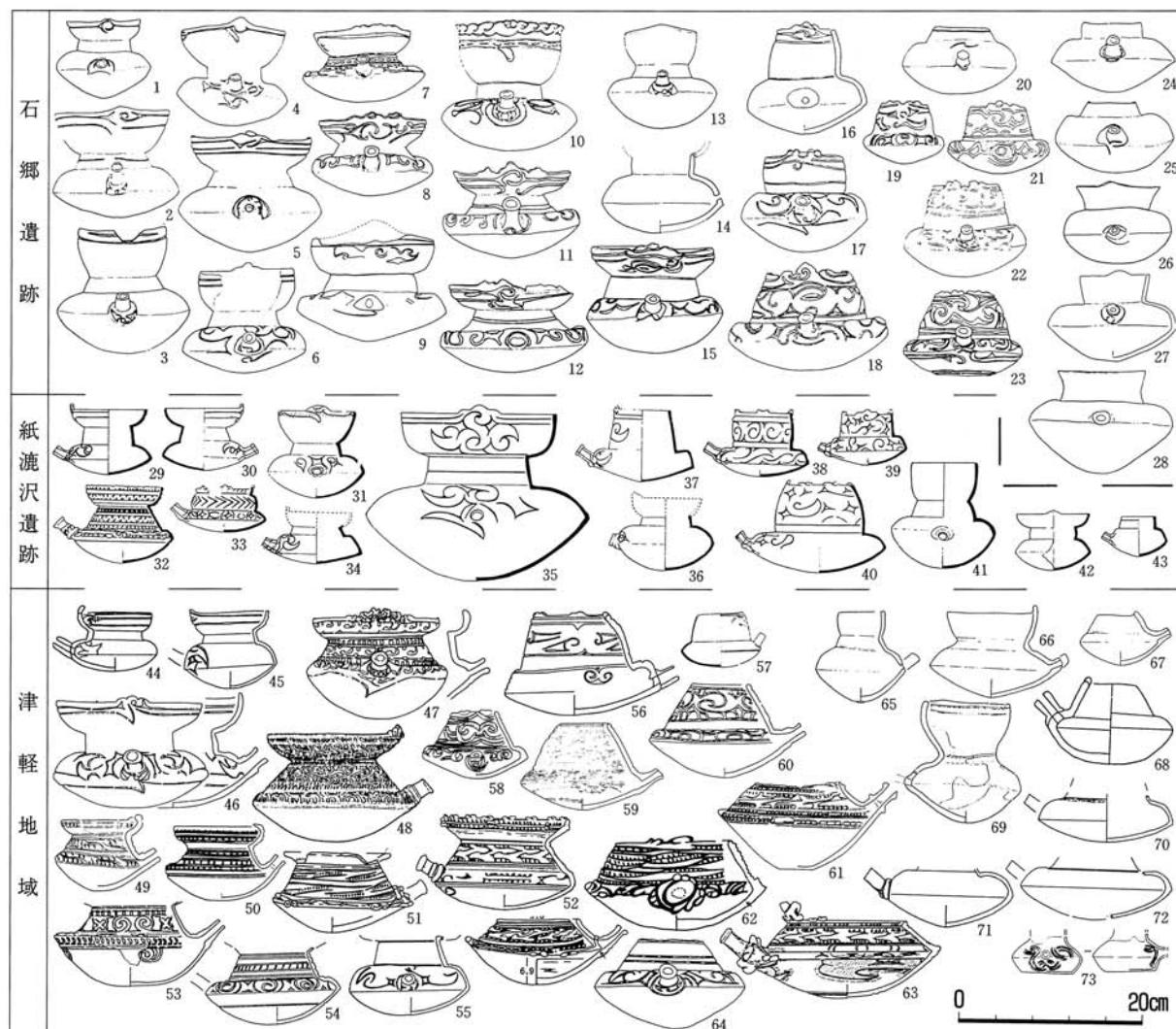


図15 東北地方の晩期注口土器（青森県2）

ではなく、分類を系統的に体系づけて類型化することを試みることが必要であろう。勿論、器形組成の問題もまた重要な課題であるが、今後、注口土器の分類やその変遷を全時期を通じてどのように止揚するべきものであるかは、重要な編年研究の課題であると考える。

類型化は段階的な変遷を捉らえることでもある。段階的とは連続性（継続性）と非連続性（断続性）を知ることである。しかしながら、大方の分類基準に共通していることは個々の形態差である。これに対して筆者は編年的な画期と鉢形と壺形という器形類型を前提にしその系統を捉らえ、類型と変遷に具体的に有機的な意味合いを持たせることを考えた。事実、変遷には大きな画期がある。中期中葉以前を別にして、中期から後期、後期から晩期にかけては注口土器の形制（形製）の確立という意味では共通しているが、その間には地域別にそれぞれ大きな変節があると共に系統的な意味合いがある。これを形態、文様差で捉らえるならおびただしい変化が見られる。このような注口土器の類型による編年的な研究と共にもうひとつの重要な課題は、その地域性の問題である。縦軸と横軸を組み合わせた所謂型式学的な編年研究を止揚する方法としての類型化のために、従来行われて来た機械的分類に何らかの意味合いを与えるべき時期に来ていると思う根拠の一つがここにある。

（2）注口土器の編年的類型とその系譜等の諸問題

日本の注口土器の変遷において、草創期から中期までは鉢形系統が主流を成した（注4）。中期から後期にかけては鉢形系統から壺形系統の要素が加わる。それには地域的な二面性があり、東北地方

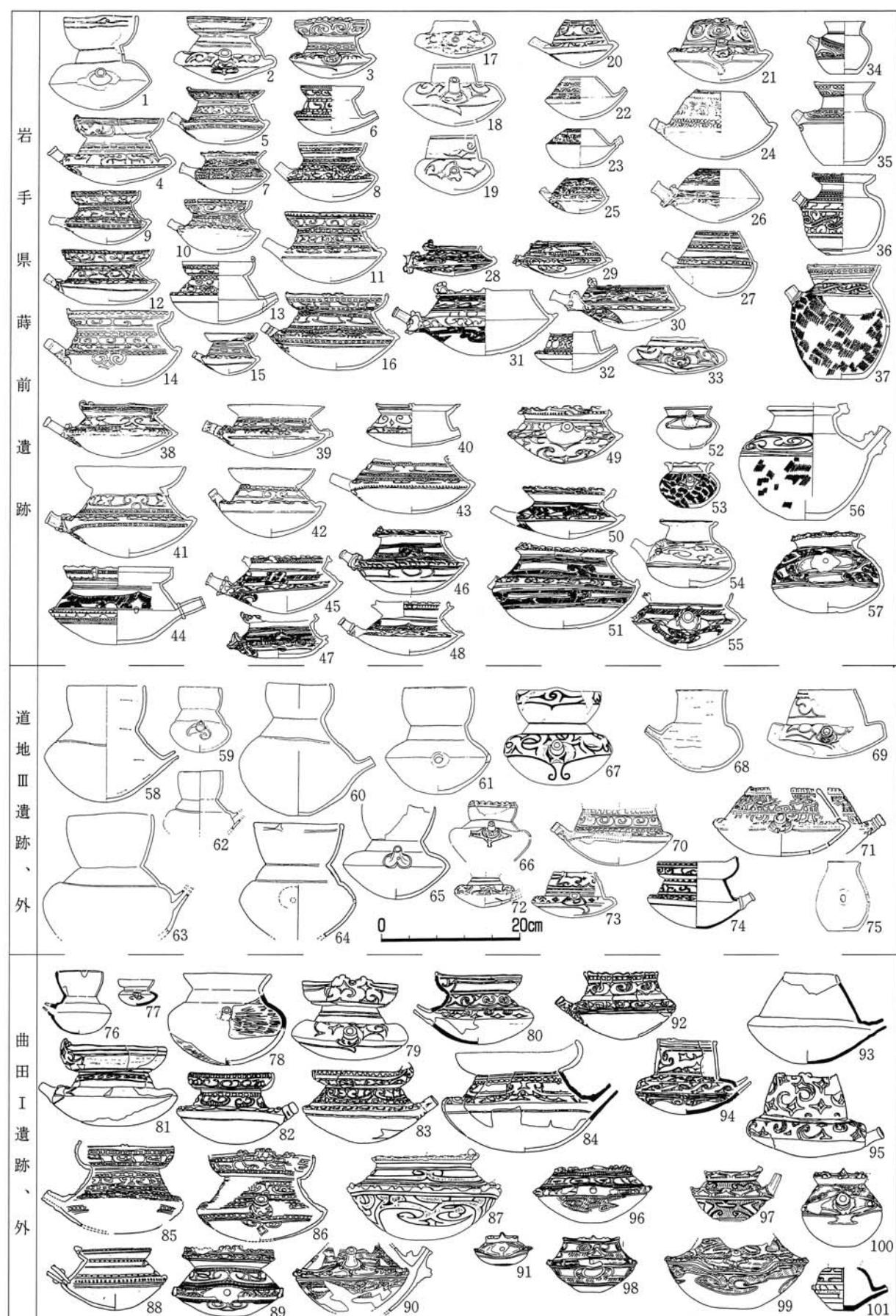


図16 東北地方の晩期注口土器（岩手県1）

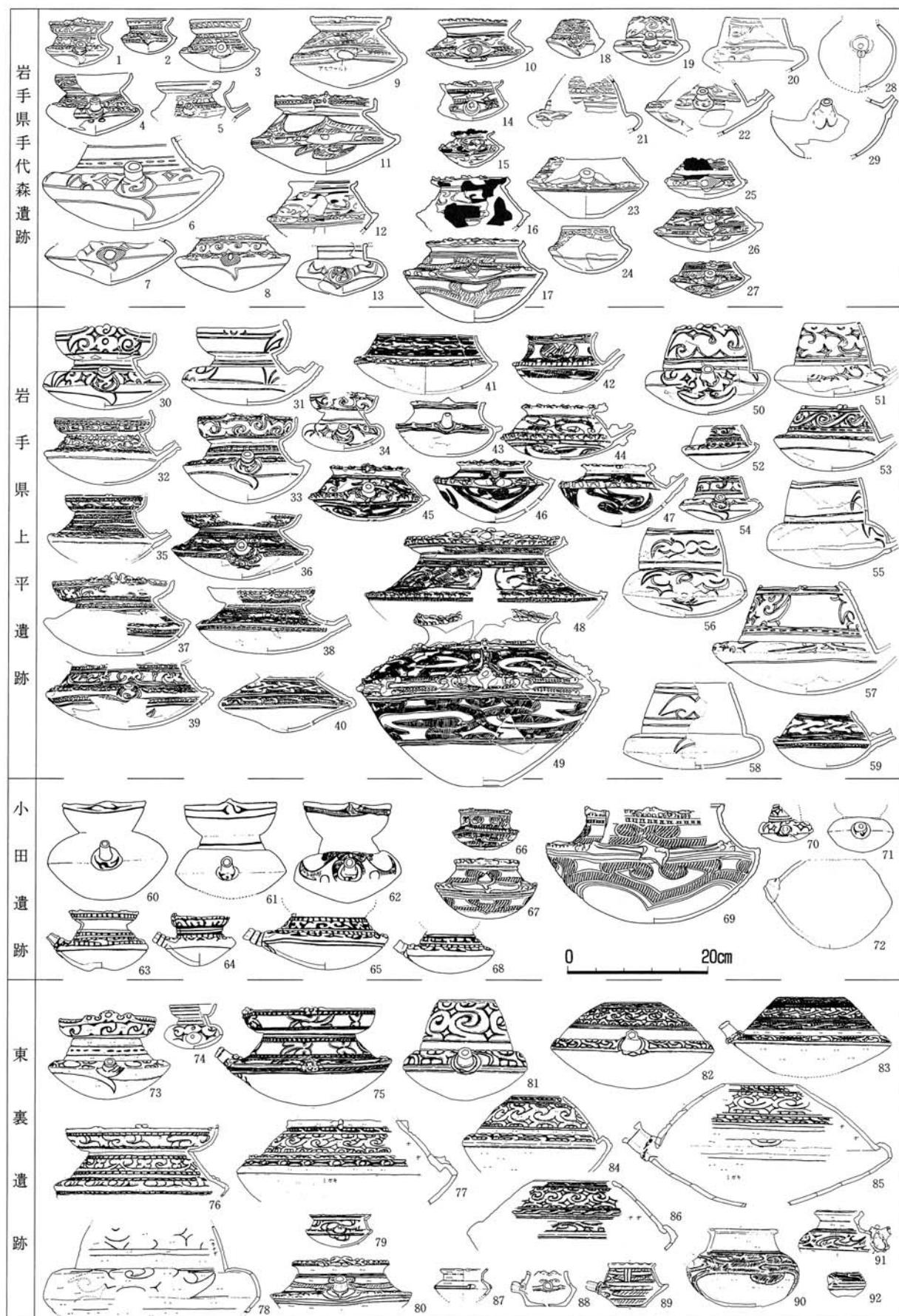
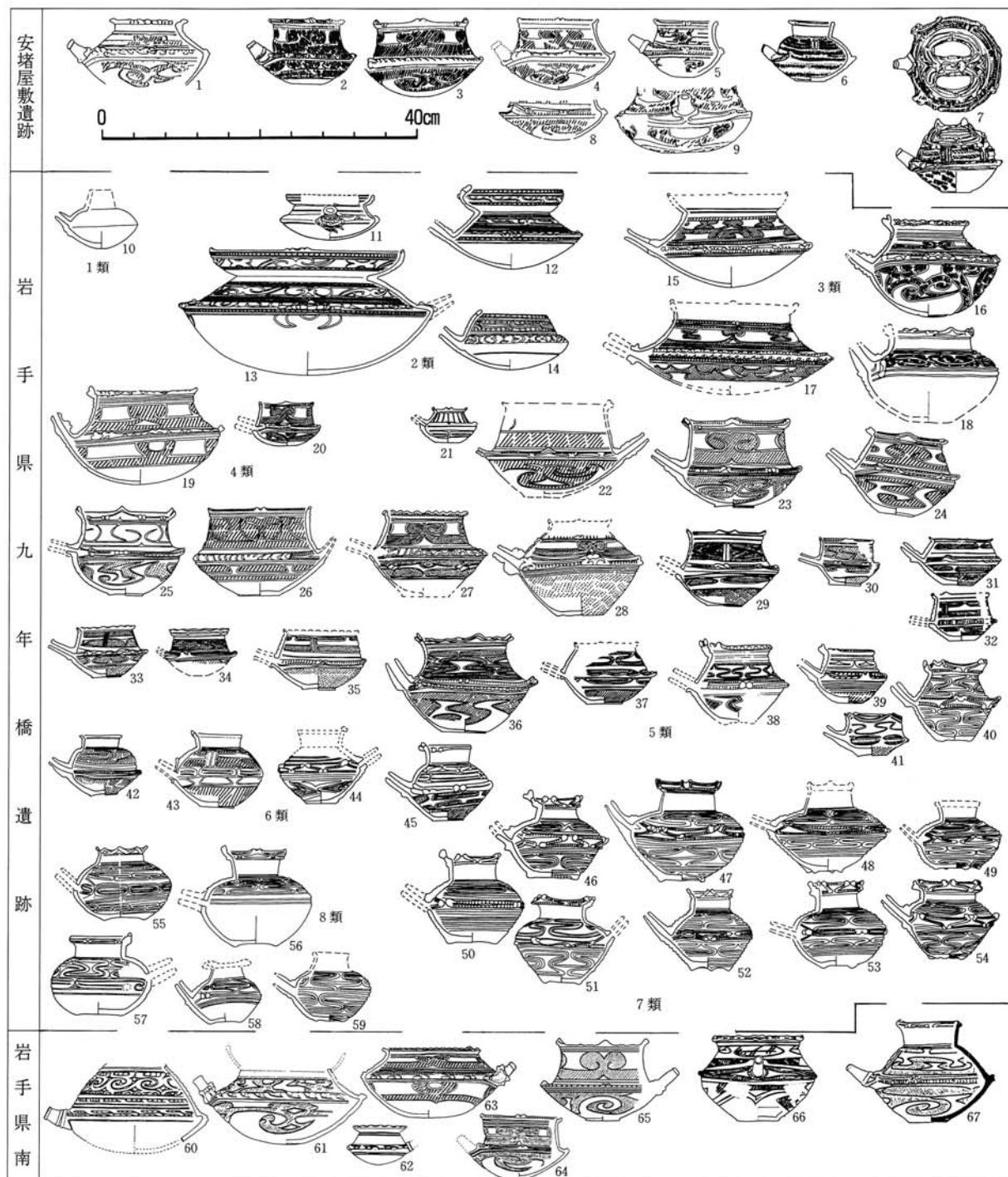


図17 東北地方の晩期注口土器（岩手県2）



(九年橋遺跡図中の分類は藤村による)

図18 東北地方の晩期注口土器（岩手県3）

北部はいち早く壺形を踏襲した。東北地方南部と関東地方は鉢形と壺形を組み合わせながらも相対的に東北地方南部が壺形系統を強くし、関東地方はその度合いが弱い。一見して壺形と見える堀之内式、加曾利B式の注口土器の器形は独自な器形の注口土器と言われるが、基本形は鉢形でそれに壺形の影響が強く係わったものである。この諸相に注口土器の型式学上の問題がある。関東地方の堀之内1式の注口土器は東北地方の強い関与のもとに成立したと考えられた（池谷1990）にも係わらず、大木10b式の浅鉢形から形態変化して成立したと説明されただけで、これでは体部が球形の関東地方特有な注口土器の形成過程は理解されない。称名寺式の類例が池谷と西田（1992）では見解が異なるようだが、

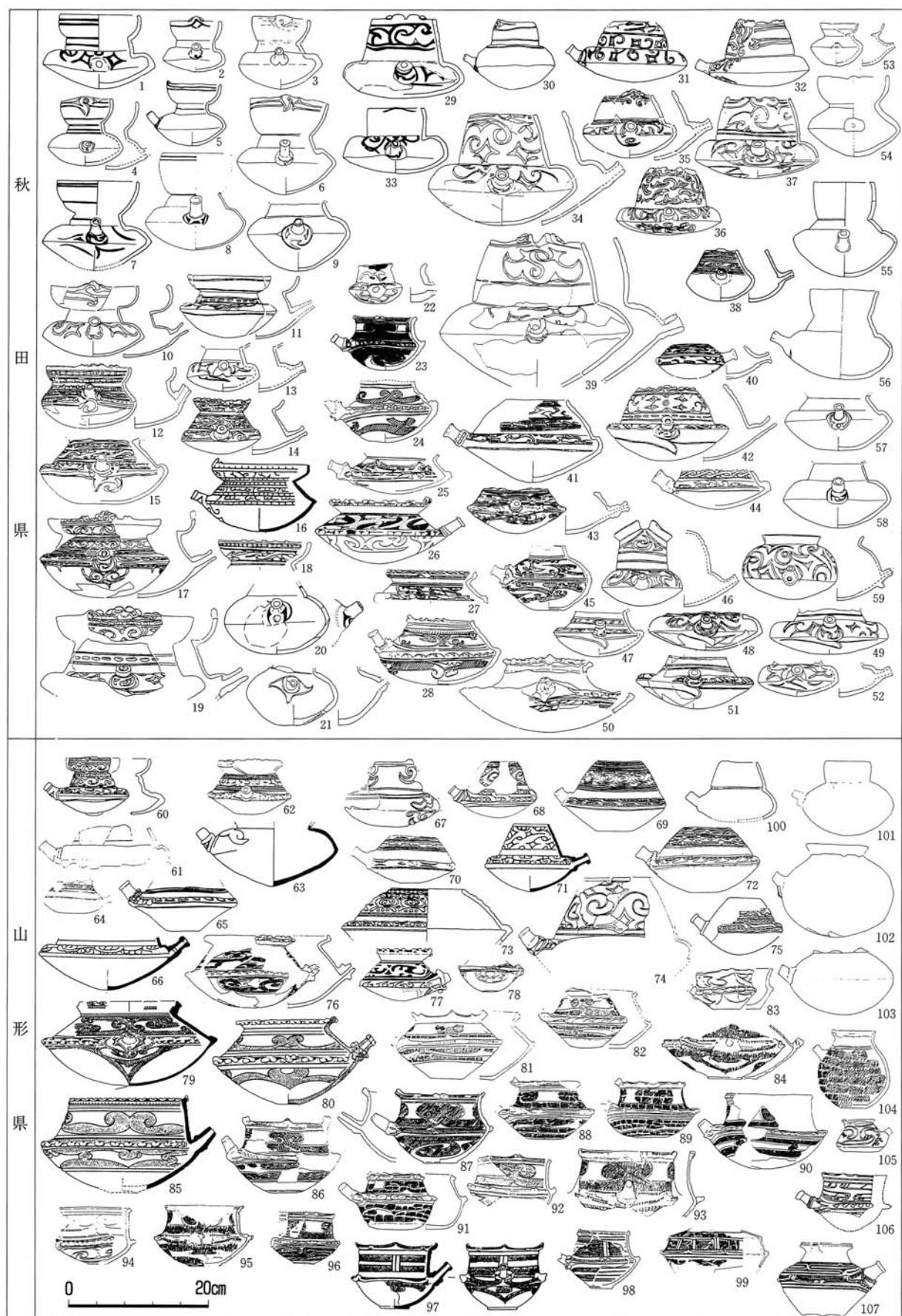


図19 東北地方の晩期注口土器

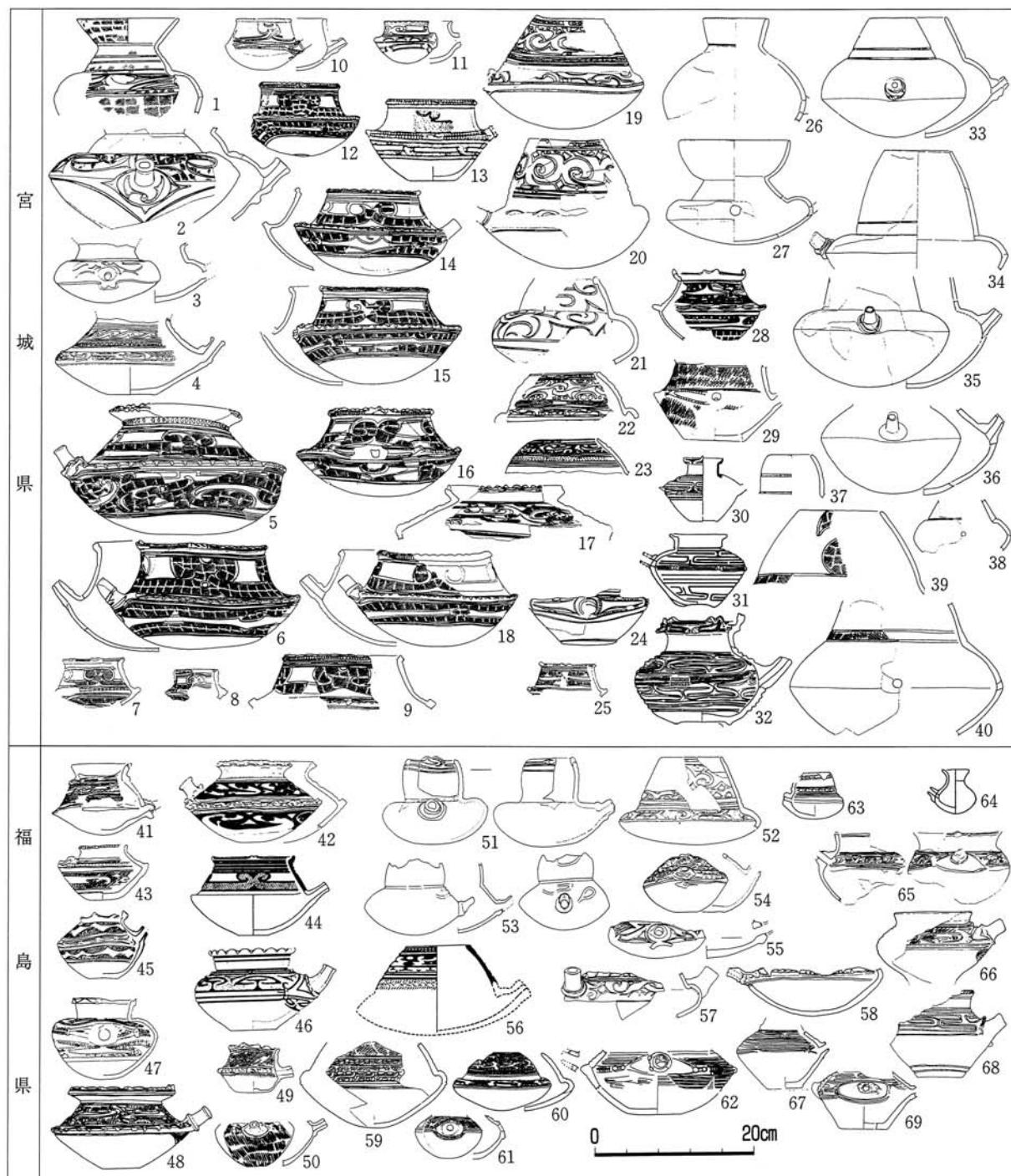


図20 東北地方南部の晩期注口土器

そのような大木10式から継続する鉢形の系譜に関東地方の同時期の他の土器（壺形ないし甕形）の器形（池谷の言う在地的注口土器を含む）の形態的特徴の影響と口縁部が明瞭な壺形の影響の2段階を経て完成した形態だと考える。前段階までは東北地方南部と深く係わるが、後段階では関東地方としての独自性を強める。その一方で、堀之内2式のソロバン形注口土器は東北地方南部の大木式の浅鉢形に由来するもので、東北地方よりは関東地方で昇華した器形である。その後の注口土器の形制は、堀之内式、加曾利B式の注口土器（池谷による綱取・堀之内型）と宝ヶ峯型に大別され、この両者の注口土器の出自形成は大きな問題で、堀之内2式、加曾利B式の体部が球形の注口土器の出自が一系統であるかのような、壺形の影響を観察する視点が池谷の論考に欠けている。鉢形と壺形は日本の繩

文土器の基本形であって、相互に影響があつても生物学の進化系統樹に似た進化論として鉢形が壺形に直接変化することはあり得ない法則である。

以後、東北地方と関東地方では注口土器の発展の軌跡、過程が異なる。その間には甕形の存在を忘却することができない。関東地方の場合は壺形系統を継続することは無かった。正確に言えば長続きしなかった。東北地方の場合は後期初頭の変節とは打って変わって後期中葉以降は例外があつても全て壺形系統として発展して晩期亀ヶ岡式の注口土器に成就する。

関東地方の後期後葉以降については、主に東北地方に注口土器が盛行したために十分に説明をする余裕がなかつたが、東北地方においては磨消繩文、無文、研磨手法の注口土器の三者が注口土器の主流を成し、器形上の類型化が宝ヶ峯型注口土器として完成した。後期から晩期にかけて無文注口土器の存在は一過性のものかもしれないが、侮れない。それ以上に、宝ヶ峯型の形製において口縁部が内傾するものと外反する二形態、丸底、尖底に近い底部形態が出自することの意義を考えなくてはなるまい。類型上、A型、B型としたが、後期、晩期の区分を越えた機械的な分類から系統的な継続性を主張する意図をそこに図った。特に、宝ヶ峯型注口土器の重要性はその文様にもある。例えば、東北地方全域に存在するみみず張り状文もこの宝ヶ峯型の文様に發する。

注口土器に施文される磨消繩文は東北地方北部に發達した。その中で後期中葉から後葉にかけては西の浜式や十腰内5式に代表されるような櫛掛け状文が盛行して一時期を画する。亀ヶ岡式のそれが偏平で丸みを帯びることに対して、当該期には多段化した長胴の大型な注口土器が發達し、以後全体的に無文注口土器が多くなる。この間、一貫してA型が主流をなすが、再びA型、B型が台頭して亀ヶ岡式注口土器の基礎を作る。

このように後期注口土器の変遷過程には、十腰内1式、南境式と十腰内2式、宝ヶ峯式と十腰内5式と十腰内6式に至る段階（画期）が存在する。それは従前の基本形であった鉢形系統から壺形系統に移行する過程でもあり、十腰内2式以降の壺形系統に席巻される器形系統の変節の過程を物語るものである。東北地方では稀に鉢形注口土器、関東地方では堀之内式、加曾利B式の特有な形態を生み出しながらも、東北地方で宝ヶ峯型として完成したA、Bの類型は継続され、亀ヶ岡式注口土器に漸次移行する。その亀ヶ岡式注口土器に至って同じ器形の土器が他に見ない注口土器の独自な器形が成立する。亀ヶ岡式注口土器をして筆者は、A～D型を分類した。A、B型は後期ないし宝ヶ峯型からの継続形態である。この中でD型はB型からのバリエーションか、鉢形系統の（要素を取り入れた形態）可能性があるが、例えればそれはキメラの注口土器や異系統の類例が出没するようにこの間の器形系統については再考する余地がある。

元来注口土器には器形の系譜上の点から独自な器形というものは極めて少なかつた。大半が鉢形か壺形、ないしは甕形のバリエーションに過ぎない。しかし、一見して壺形であるかのような堀之内式、加曾利B式の注口土器が存在するし、亀ヶ岡式特有な注口土器が存在する。前者の無頸の壺形に似た注口土器は大局には鉢形系統でそれに壺形の影響が加わり、後者は壺形系統に入る。注口土器を考える上で、この形制（形製）の変節と微細な係わり具合が大きな問題だと考える。当然、用途機能の問題もこの問題と連動している。したがって、特定の時期の類例を以てその用途機能を規定したり、鉢形、壺形系統の類型を同一視することは出来かねる。また、池谷は把手の機能性を考えているが、この点について新潟県、埼玉県、福島県、宮城県の主要な類例を観察した限りでは紐穴に使用痕は認められなかった。装飾性の方が強いと思う（注5）。

本論では繩文時代の全時期の注口土器を対象に考察した。安易な用途機能を論じる昨今の研究姿勢に個々に反論しても水掛け論に終始するであろうと考え、鉢形と壺形の系統の注口土器が存在することを示すことによって暗に警鐘を促した。最後に、注口土器の終焉の様相を示し擱筆する。晩期の注

口土器は亀ヶ岡式土器を代表する器形の一つである。この亀ヶ岡式は大方東北地方北半部に盛行したとされることが多いが、注口土器の多寡を見ると図23に示したとおりその終末期には岩手県南部の九年橋遺跡が所在する地域に多く、必ずしも亀ヶ岡式の中核地域である北部に多い訳ではない。縄文時代最後の注口土器は東北地方の北と南では南に多いのである。その意味を考えることも大きな課題である。

中谷治宇二郎以外の研究は、全て特定の時期、地域の研究に終始し、その指向は編年である。しかし、土器型式編年は注口土器という一器形でのみ確立することはできない。本論では注口土器の類型化を図り、全時期における注口土器の変遷と画期を捉らえ、時期によってその器形系統が変わっていることを明らかにした。

今後更に、注口土器の類型化とその編年の問題を詳細に深めることが大事である。その編年を基礎に、地域性や用途機能の問題を含めた文化、社会の仕組みを理解する方法論を磨くことが課題であろう。発掘事例の観察には意を尽くせなかった点が多い。また、細部にわたる器形々状変化や文様との関係からみた編年の詳細な問題点など、今後に残された課題も多い。執筆にあたり、藤沼邦彦、能登健、大塚昌彦、戸田哲也、丹羽茂、小熊博史、小倉均、阿部博志、田中則和、池谷信之、山岸英夫、工藤肇などの学兄や新潟県埋蔵文化財事業団、福島県文化センター、八戸市、仙台市教育委員会等の職員にご助言や資料提供の便宜等を賜ったことを記し、感謝申し上げる。なお、紙面の都合により多数な掲載資料の出典文献を記載できなかったことが残念である。

注記

- 注1 基本的には晩期に鉢形の注口土器はないが、中葉に断面形が算盤形を呈するものがある。この中に鉢形系統の要素が取り入れられた可能性はある。
- 注2 東北地方などの類例は、後述するように丹野雅人、池谷伸之、西田泰民、鈴木徳雄らも集成している。それらは相当数に上るので本稿では東北地方に隣接する県の一部の類例を掲載した。
- 注3 本稿では東北地方の前期の片口形を取り上げた。厳密には注口土器からは外れる。後期から晩期の片口形は外した。片口形にも時期、地域による違いがある。
- 注4 上記したように早期の熊本県瀬田裏遺跡の有孔の広義な注口土器は、唯一独特な尖底の壺形である。
- 注5 注口土器の用途、機能の推定問題は実証的に語るべきものである。後期以降には朱塗も多いが、室谷、静川5、六反田遺跡などの鉢形系統の類例には炭化物の付着が認められ、煮沸容器の可能性が高い。勿論、これだけでこの問題を全て規定するつもりはない。

参考文献

- 山崎 美成 1824 (文政7年) 耽奇漫録
- モース 1879 大森貝塚 東京大学理学部紀要1-1
- 神田 孝平 1887 古土器図解 東京人類学会報告2-17
- 佐藤 重紀 1889 アイノ沢遺跡探査記 東京人類学雑誌5-45
- 若林 勝邦 1890 貝塚土器図解 東京人類学雑誌5-54
- 坪井正五郎 1891 ロンドン通信 人類学雑誌6-58
- 若林 勝邦 1893 陸奥国二戸郡小鳥谷村石器時代の遺跡 東京人類学雑誌8-84
- 坪井正五郎 1893 西ヶ原貝塚探査記報告其一 東京人類学雑誌8-85
- 八木奘三郎 1893 埼玉県大宮公園より所出の土器 東京人類学雑誌8-90
- 坪井正五郎 1893 西ヶ原貝塚探査記報告其三 東京人類学雑誌9-91
- 若林 勝邦 1894 常陸国福田村貝塚探査報告 東京人類学雑誌9-100
- 若林 貝塚 1894 陸前磐城両地方二三ノ遺跡 東京人類学雑誌9-102
- 中沢 澄男 1898 常南総北の遺跡 人類学雑誌14-152
- 川角 実吉 1898 常陸国福田貝塚発掘報告 東京人類学雑誌14-153
- 大野延太郎 1899 石器時代土瓶 東京人類学雑誌14-156
- 八木奘三郎 1902 『日本考古学』
- 高橋 健自 1913 『考古学』

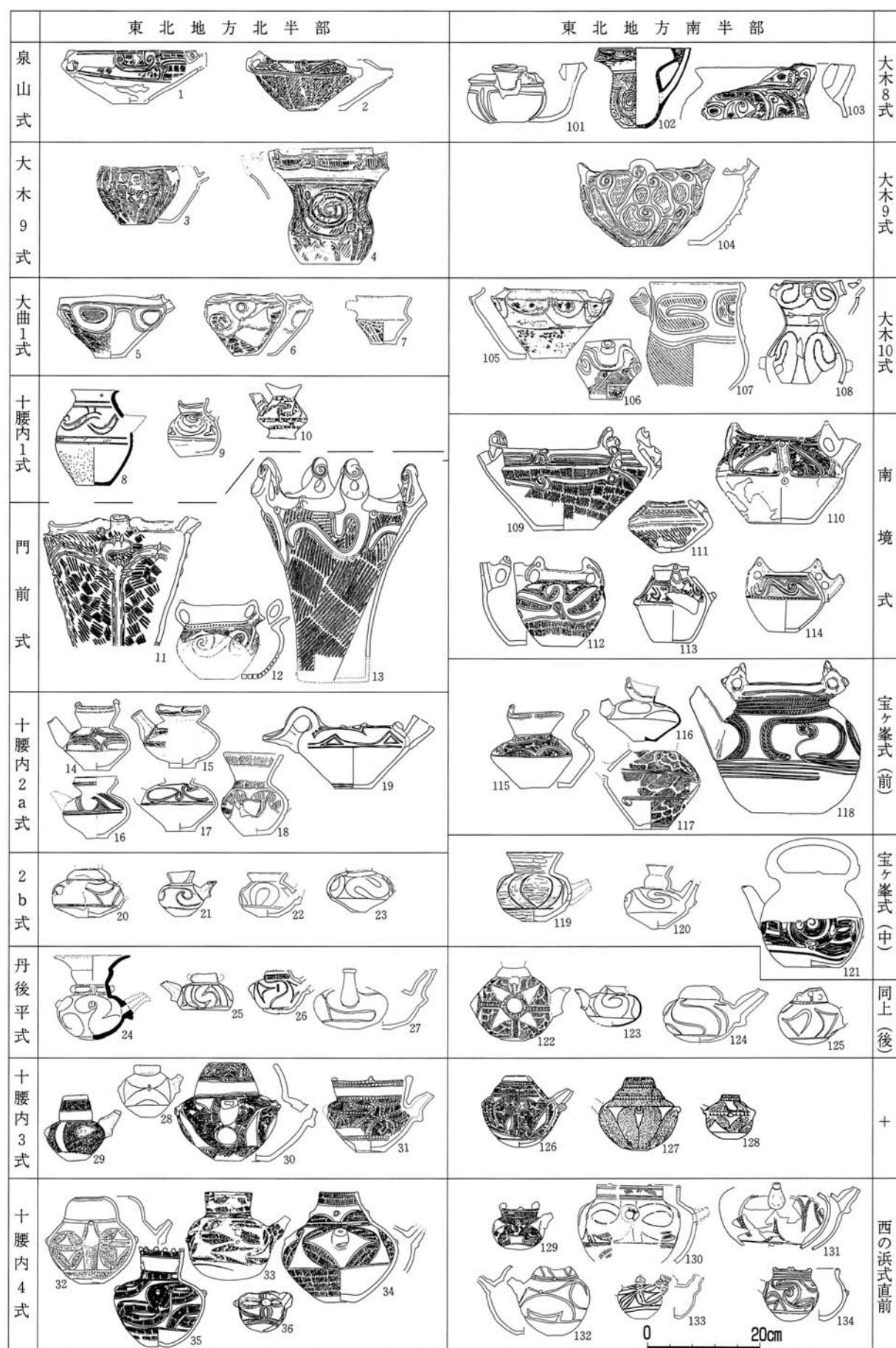


図21 東北地方注口土器変遷図(1)

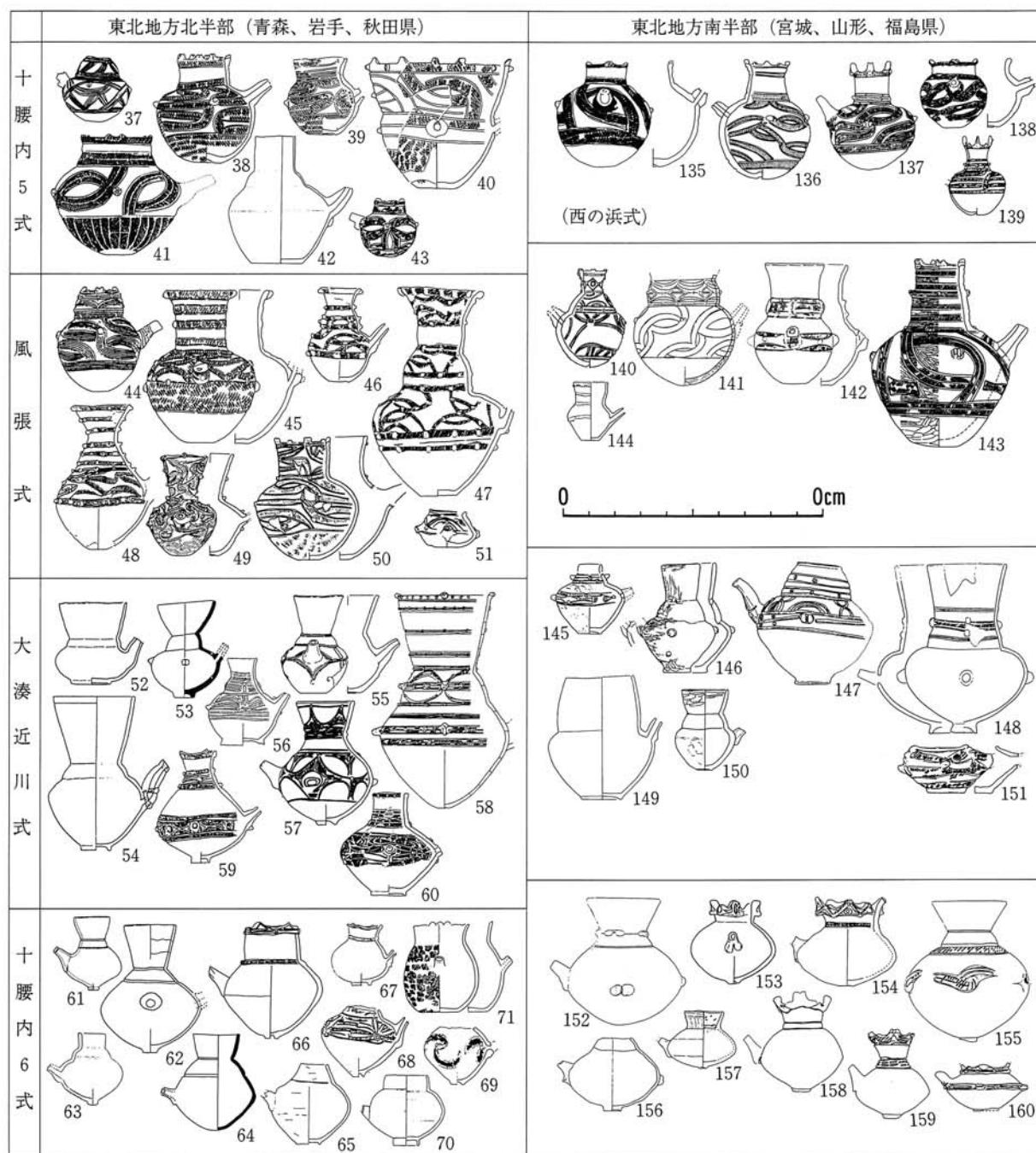


図22 東北地方注口土器変遷図(2)

石田（収蔵）1915 最近発掘石器時代土器（口絵説明） 人類学雑誌30-6

中谷治宇二郎 1926 注口土器の分布に就いて 人類学雑誌41-5

後藤 守一 1927 『日本考古学』

中谷治宇二郎 1927 注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布 東京大学人類学教室研究報告4

八幡 一郎 1928 書評 中谷治宇二郎著 注口土器の分類とその地理的分布 人類学雑誌43-1

杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸概説』

山内 清男 1929 Nakaya: A study of the stone Age Remains of Japan 史前学雑誌1-3

樋口 清之 1929 弥生式注口形土器について 史前学雑誌1-2

中谷治宇二郎 1929 弥生式注口形土器なる文をみて形式分類の立場を論ず 史前学雑誌1-3

大場 磐雄 1935 『考古学』

中谷治宇二郎 1936 日本新石器文化の一考究 考古学7-1、2

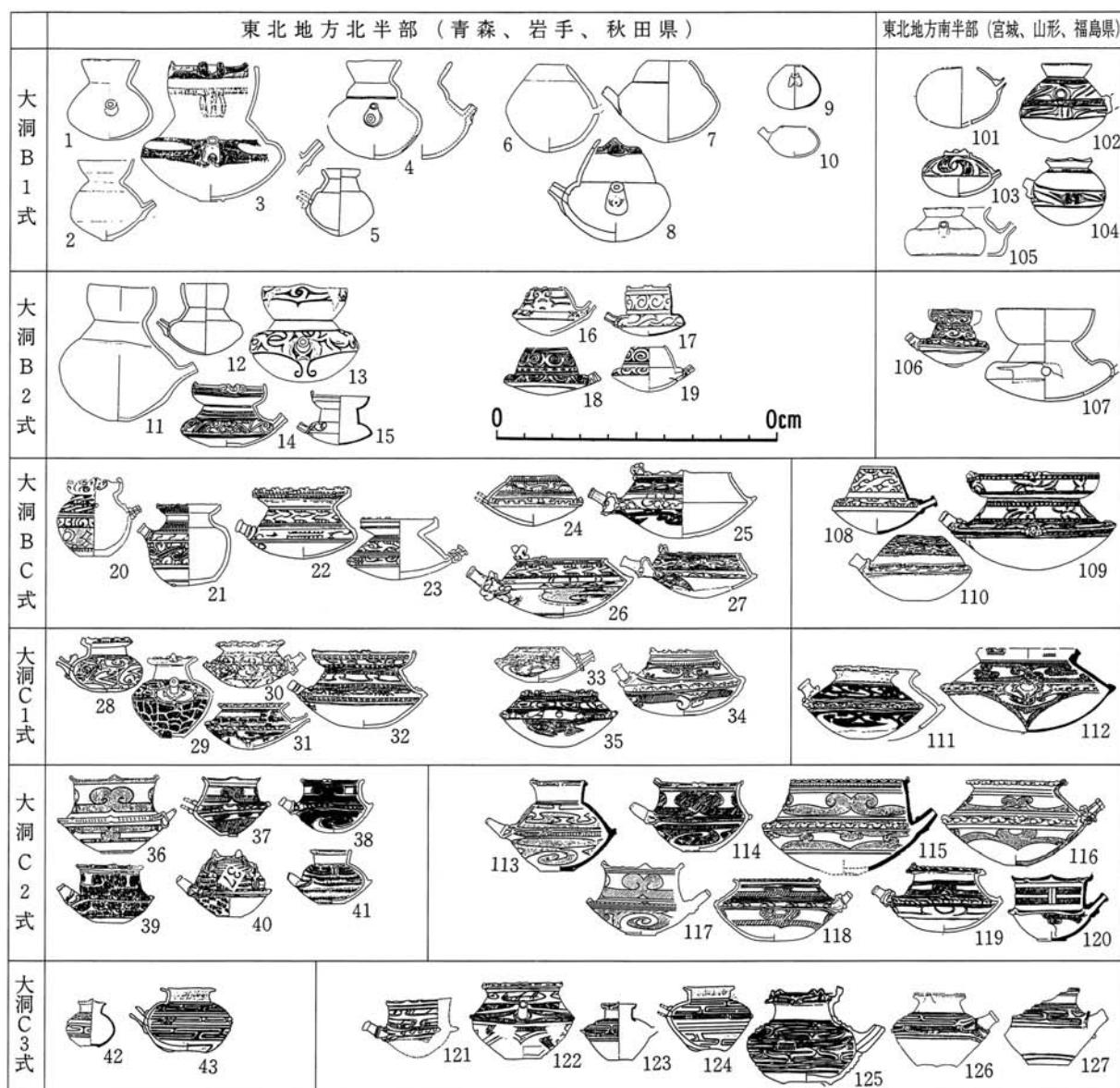


図23 東北地方晩期注口土器変遷図

- 山内 清男 1939 日本先史土器図譜
 山内 清男 1940 日本先史土器図譜
 中谷治宇二郎 1943 『日本考古学提要』
 後藤 守一 1943 『先史時代の考古学』
 八幡 一郎 1953 『日本史の黎明』
 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸』
 甲野 勇 1953 『縄文土器のはなし』
 江坂 輝弥 1956 東北—各地の縄文式土器 日本考古学講座3
 吉田 格 1956 関東—各地の縄文式土器 日本考古学講座3
 江坂 輝弥 1957 『考古学ノート』2
 芹沢 長介 1960 『石器時代の日本』
 藤森 栄一、武藤雄六 1963 中期縄文土器の貯蔵形態について 考古学手帖20
 江坂 輝弥 1964 前期の土器 日本原始美術1
 磯崎 正彦 1964 後期の土器 日本原始美術1
 長岡市立科学博物館 1964 室谷洞窟
 後藤 守一 1965 衣・食・住 日本考古学講座3
 渡辺 誠 1965 勝坂式土器と亀ヶ岡式土器の様式構造 信濃17-2

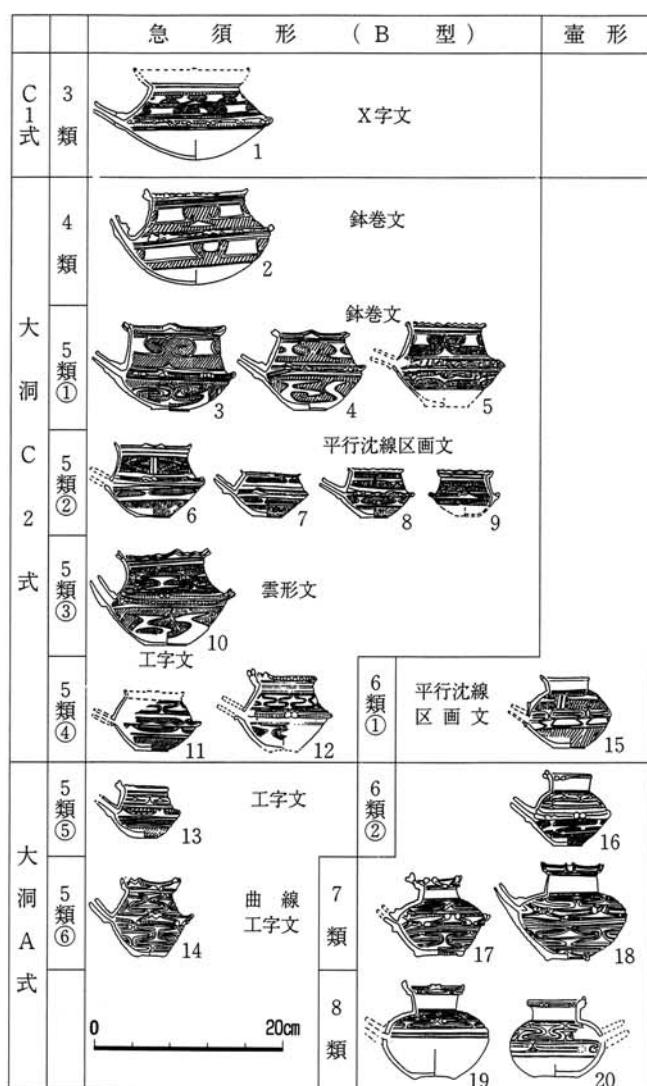
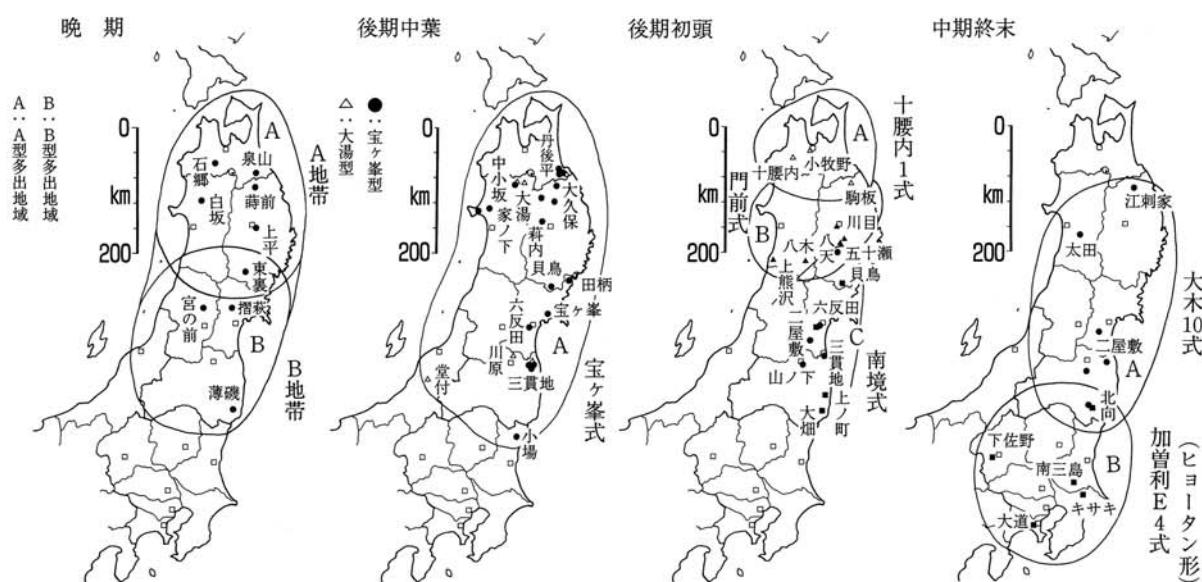
図24 藤村分類 (大洞C₁～A式)

図25 注口土器類型分布図 (分布図)

- 山内 清男 1967 『日本先史土器図譜』
- 江坂 輝弥 1967 『日本文化の起源』
- 馬目 順一 1968 台の上貝塚に於ける土器意匠文の研究 小名浜
- 江坂 輝弥 1972 学史上における中谷治宇二郎の業績 日本考古学選集24
- 丹羽 茂 1972 縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論 福島大学考古学研究会研究紀要1
- 藤村 東男 1972 東北地方における晚期縄文時代の注口土器について 史学44-2
- 八巻 一夫 1973 東北地方南部における縄文時代中期末葉の集落構成 福島考古14
- 藤村 東男 1977 晩期縄文式土器の器形組成 萌木12
- 藤村 東男 1980 東北地方における晚期縄文式土器の器形組成 史学50
- 小林 達雄 1981 縄文土器の用途と形 縄文土器大成2
- 岩手県立博物館 1982 岩手の土器
- 新井 和之 1982 黒浜式土器 縄文文化の研究3
- 安孫子昭二 1982 縄文時代後・晚期 『村山市史』
- 近藤 義郎、佐原 真 1983 『大森貝塚』(岩波文庫)
- 山梨県考古博物館 1984 縄文時代の酒道具
- 丹野 雅人 1985 注口土器小考 東京都埋蔵文化財センター研究論集3
- 宮城県教育委員会 1988 大梁川・小梁川遺跡
- 藤村 東男 1988 岩手県九年橋遺跡出土の注口土器について 萌木23
- 鈴木 一男 1989 神奈川県大磯町大磯小学校遺跡出土の注口土器 考古学雑誌74-3
- 池谷 信之 1990 綱取・堀之内型注口土器 縄文時代1
- 緒方 勉 1991 熊本県大津町瀬田裏遺跡出土の縄文早期の注口土器 考古学雑誌77-1
- 西田 泰民 1992 縄文土瓶 古代学研究所研究紀要2
- 鈴木 徳雄 1992 縄文後期注口土器の成立 縄文時代3
- 須藤 隆 1992 東北地方における晚期縄文土器の成立過程 東北文化論のための先史学歴史学論集
- 大津町教育委員会 1992 瀬田裏遺跡調査報告 資料II
- 大津町教育委員会 1993 瀬田裏遺跡調査報告II
- 鈴木 克彦 1996 東北地方における十腰内式土器様式の編年的研究 考古学雑誌81-4
- 奥野 麦生 1996 関山式における片口土器の基礎的研究 埼玉地域文化研究
- 苦小牧市教育委員会 1996 静川5遺跡発掘調査概要報告書